



2010年度 活動報告書

Tokai
University
Student
Project
Center
Activity
Report
2010

 東海大学チャレンジセンター

〒259-1292

神奈川県平塚市北金目4-1-1

Tel : 0463-58-1211 (代)

Fax : 0463-50-2472

Mail : challenge@tsc.u-tokai.ac.jp

URL : <http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/>



東海大学チャレンジセンター

2010年度チャレンジセンター活動報告書の発行にあたって

チャレンジセンター所長
大塚 滋

チャレンジセンター発足5年目の活動報告書を発行するにあたり、この1年を振り返るとともに、2011年度以降の課題についても、申し述べたいと思います。

東海大学は、2010年度、「自ら考える力」「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を養成すべき力として掲げてカリキュラム改訂を行い、教育活動を行ってまいりました。チャレンジセンターが掲げてきた三つの力が全学的な教育プログラムに組み込まれた記念すべき年であります。2009年度の活動報告書において報告いたしましたとおり、私たちは大学のその新たなスタートにあわせて、達成度評価のための指標の提案もいたしました。しかし、2010年度の終わりにあたり、提案を実現に導くための努力が十分でなかったことを認めざるをえません。センター内での教育実践および教育改善に多くのエネルギーが割かれ、その成果を他の教育部門に波及させる余力が不足していたからであります。大学の教育改革をより力強く実りあるものにするために、私たちは、5年間の教育実践の成果を全学に浸透させる方策を早急に行うべきと考えています。

私たちはすでに、「自ら学ぶ意欲を引き出す理系教育プログラム」という授業パッケージを提案し、一定の学部学科のご協力の下、実践に移し始めましたが、来年度はさらに学部学科の範囲を広げ、地道に成果を積み上げ、最終的には、理系に限らず、すべての学部学科に対応できるよう複数のパッケージを提案、実践し、そのことによって大学の教育改革を推進していきたいと考えています。

また、それとあわせて、これまで必ずしもわかりやすく伝えられていなかった「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の「見える化」を図らなければならないと思います。たとえば「集い力」をなぜ身に付けさせなければならないのか、どのような教育手法を用いればそれができるのか、ということだけ

でなく、その力が身に付いた、という状態はどのようなものなのか、それをどのようにして測るのか、ということをも可能な限り具体的に提示する工夫をし、その努力の成果を、FD研究会等を通じて全学の教員だけでなく職員にも知ってもらわねばなりません。これらの力の養成は教職協働による教育によってはじめて可能になるからです。

今年度から2名の専任教員体制となったジャーナリズム実践教育コースにおいては、複数の有為な修了認定者を出すことができました。来年度以降さらに多くの受講者を獲得し、チャレンジスピリットをもった修了認定者を輩出することが期待されます。

チャレンジセンターは、大学統合後、北海道から九州までのすべてのキャンパスをカバーする組織となり、各キャンパスからもいくつものプロジェクトが立ち上がりましたが、それらを支援する体制はまだまだ十分なものとはいえません。そこで、相互を隔てる距離を可能な限り実質的に近くする工夫を来年度から実践したいと考えています。たとえば、プロジェクトリーダー等を集めたリーダー研修会の実施はそのひとつです。また、現在各キャンパスでは教学課等がチャレンジセンターの業務を担っていただいておりますが、それに積極的に関わっていただく教員を選任することや、チャレンジセンター科目を担当する教員の選任も必要だろうと思います。まさに教職協働による社会的実践力の教育の基礎であるはずだからです。

今年度のプロジェクトは多くの成果を残してくれましたが、なかでも強調しておきたいのは、その活動が外部から高く評価されたプロジェクトがいくつもあったことです。他のプロジェクトもそれらから多くのものを学び、成長してくれることを期待しています。彼らの成長こそが、「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の何たるかをもっと明瞭に見せてくれるからです。

2011年3月

INDEX

2010年度
チャレンジセンター活動報告書の
発行にあたって 1

チャレンジセンター支援体制 3

プロジェクトコーディネーター・アドバイザー 5

2010年度のチャレンジセンターの活動 7

新たな取組みについて 9

2010年度プロジェクト活動報告 10

チャレンジセンター科目 33

自ら学ぶ意欲を引き出す
理系教育プログラム 37

ジャーナリズム実践教育コース 39

FD研究会 41

ミニセミナー 43

広告媒体物
(ポスター・チラシ・パンフレット) 45

ニュースリリース(湘南キャンパス) 47

メディア露出一覧 47

2010年度活動一覧 49

チャレンジセンターは社会的実践力を培い 自ら未来を切り開く人を育てます。

社会が
必要とする
人物像

自らの力で未来を切り開く

2010年、大学生の内定就職率は過去最低の水準を記録するなど、社会情勢はますます厳しさを増しています。多くの学生が希望をもって卒業後のキャリアデザインを描くことが困難な時代となりました。このような現状に伴い、日本の大学教育は専門科目の充実に加え、現代社会を生き抜く人間力を育成する場として、その役割を拡大させてきました。本学は、いち早くこの社会動向を捉え、『集い力』『挑み力』『成し遂げ力』を教育目標に掲げたチャレンジセンターを2006年に設立し、学生が企画を立案・実行するプロジェクト活動の支援と、「気づき」を促す様々な演習を組み込んだ科目を開講してきました。

チャレンジセンターは、学生が主体となって、ものづくり系や社会貢献系などの自由な企画を立案する「チャレンジプロジェクト」と、少人数のグループで将来的に大きな活動に発展することを目的とした「ユニークプロジェクト」の二種類のプロジェクト活動を展開しています。「チャレンジプロジェクト」は、「複数学科を横断してメンバーが構成されていること、参加人数が50名以上であること※1」という2つの要件をクリアしなければなりません。2010年度は5キャンパス13プロジェクト※2がこのハードルをクリアし、総合大学である本学の特色を活かした学部学科・学年の枠を越える約1500人の学生たちが、意見をぶつけ合いながら、目標達成に取り組みました。

本センターは、全プロジェクトに対し、教職員で構成されたプロジェクトコーディネーターとプロジェクトアドバイザーがメンタル面や活動に関わる専門知識の指導を行うサポート体制を整えています。さらに、活動場所の提供、支援金の交付、学生の視点からプロジェクトを活性化する運営スタッフの協働などプロジェクト活動通じたキャンパスライフの充実を多角的に支えています。

また、チャレンジセンター科目では、『集い力』『挑み力』『成し遂げ力』を培うための授業を展開しています。今年度は約3700人（ジャーナリズム実践教育コースも含む）の学生が履修しました。この科目では、現代社会を生き抜く上で必要なリーダーシップやマネジメントスキルを学生が身に付けていきます。

2010年度は、ライトパワープロジェクトの国際大会三連覇の達成、キャンパスストリートプロジェクトの「グッドデザイン賞」受賞をはじめ社会的にも大きな評価を多方面からいただくことができました。2011年度も、チャレンジセンターは、他者との関わり合いの中で新しい自分の側面に気づき、自らの力で未来を切り開く人間を育てる場として社会に貢献していきます。

- ※1 プロジェクトの構成人数はキャンパスによって異なります。
- ※2 2010年度ユニークプロジェクトは8キャンパス25プロジェクトが採択されました。

チャレンジセンター 科目

集い力

多様で広範な人々と協働する能力

コミュニケーション

関係構築

アイデンティティ獲得

リーダーシップ
スキル

挑み力

難しい課題に立ち向かう能力

問題発見

構想力

プランニング

マネージメント
スキル

成し遂げ力

困難を乗り越えて目標を実現する能力

工程管理

実行と継続

分析と修正

マネージメント
スキル

- ・過去最低水準の内定就職率
- ・卒業後のキャリアデザインを描くことが困難

大学生を
とりまく
社会情勢

プロジェクト活動

チャレンジセンター科目

従来の大学の授業とは異なる、学生自身に「気づき」を促すさまざまな演習を組み込んだ授業を通して、実社会において自身がぶつかる様々な問題の解決方法を身に付けていきます。

プロジェクト活動

チャレンジプロジェクトではものづくり系やボランティア系、地域活性系など学部や学科、そして学年の枠を超えた学生たちが意見をぶつけ合いながら、目標の達成に取り組んでいます。

プロジェクトコーディネーター・アドバイザー

チャレンジプロジェクトは、教員と職員による協働体制で支援されています。プロジェクト活動の質を高め、より高い目標を成し遂げられるよう人的な支援として、各プロジェクトには本学の教職員から選抜されたコーディネーターとアドバイザーを配置しています。なお、2010年度よりユニークプロジェクトにも、学生から支援要請があれば、本センターで審議の上、コーディネーターおよびアドバイザーを配置いたしました。

プロジェクトコーディネーター

プロジェクトコーディネーターは、プロジェクト全体の進行状況を把握し、活動全般の相談役や提出書類の作成指導を担います。また、予算管理・工程管理に関する指導や、活動が困難な状況の時に円滑に進むよう学生を元気づける「縁の下の力持ち」的な役割を担っています。なお、コーディネーターは、チャレンジセンターが実施する複数の事前研修会の受講が義務づけられています。

【2010年度 担当者一覧】

担当プロジェクト名	氏名	所属
チャレンジプロジェクト		
ライトパワープロジェクト	佐藤 多嘉雄	チャレンジセンター推進室
Tokai Formula Club	岡安 英文	湘南総務課
東海大学学生ロケットプロジェクト	広瀬 光明	情報システム開発課
キャンパスストリートプロジェクト	深谷 浩憲	チャレンジセンター推進室
環境キャラバン隊	宮川 照男	チャレンジセンター推進室
Music Art Project	河村 裕文	入学広報課
サイエンスコミュニケーター	荒井 裕貴	企画課
病院ボランティアプロジェクト	五十嵐 義和	チャレンジセンター推進室
スポーツ社会貢献プロジェクト	近藤 竜二	チャレンジセンター推進室
先端技術コミュニティ「ACOT」	下山 佳祐	九州入学広報課
	福岡 恵	熊本教学課
三保活性化プロジェクト	舟尾 隆	清水教学課
阿蘇援農コミュニティプロジェクト	高橋 誠二	阿蘇教学課
福祉除雪プロジェクト	池田 隆之	北海道研究支援課
	柳沢 篤寛	北海道研究支援課
運営スタッフ	中西 健人	チャレンジセンター推進室

担当プロジェクト名	氏名	所属
ユニークプロジェクト		
障害者自立支援プロジェクト	高橋 操	チャレンジセンター推進室
Tokai International Communication Club	中村 和子	国際教育課
TOKAI DESIGN PROJECT	青柳 豊和	技術支援課
バリアフリー推進プロジェクト	大島 美知子	図書課
アイスバンテオン・プロジェクト2011	佐藤 公俊	旭川事務室
木工製作でおこなう社会貢献プロジェクト	植野 一明	高輪支援室
takanawa共育プロジェクト	松本 浩	沼津教学課
Make Up Happyプロジェクト (MUHP)	出利葉 義次	沼津教学課
	鈴木 克典	沼津教学課
	堀口 真由美	沼津教学課
	山村 武士	沼津教学課
肥後のたまもの	六嘉 孝裕	熊本教学課
	高倉 智之	熊本事務課
LINK THE LOCAL	新村 敏博	熊本教学課
	石原 弘慎	熊本事務課
あにまるれすきゅープロジェクト	伊藤 真人	阿蘇教学課

プロジェクトアドバイザー

プロジェクトアドバイザーは、専門的知識または技能を持った教職員で、各プロジェクトに1名以上配置します。主な役割として、プロジェクト活動に対して専門的な立場から指導・助言を行います。プロジェクトの活動が、より質が高く大きなチャレンジとなるためには、プロジェクトアドバイザーの豊富な知識と経験に裏付けられたアドバイスが必要になります。

【2010年度 担当者一覧】

担当プロジェクト名	氏名	所属
チャレンジプロジェクト		
ライトパワープロジェクト	平岡 克己	工学部航空宇宙学科
	木村 英樹	工学部電気電子工学科
Tokai Formula Club	森下 達哉	工学部動力機械工学科
	長谷川 信也	工学部動力機械工学科
	神谷 孝	技術支援課
	佐野 秀実	技術支援課
東海大学学生ロケットプロジェクト	那賀川 一郎	工学部航空宇宙学科
	中篠 恭一	工学部航空宇宙学科
	田中 真	情報教育センター
キャンパスストリートプロジェクト	杉本 洋文	工学部建築学科
	岡田 章子	文学部広報メディア学科
環境キャラバン隊	藤田 成吉	教養学部人間環境学科
Music Art Project	梶井 龍太郎	教養学部芸術学科
	二宮 洋	教養学部芸術学科
	田丸 智也	高輪教養教育センター
サイエンスコミュニケーター	岡田 工	チャレンジセンター
	園田 由紀子	チャレンジセンター
	広川 美津雄	教育研究所
	山本 義郎	理学部数学科
	新屋敷 直木	理学部物理学科
	西嶋 恭司	理学部物理学科
病院ボランティアプロジェクト	児玉 千代子	健康科学部看護学科
スポーツ社会貢献プロジェクト	松浪 稔	体育学部スポーツレジャーマネジメント学科
	伊藤 栄治	体育学部スポーツレジャーマネジメント学科

担当プロジェクト名	氏名	所属
ユニークプロジェクト		
先端技術コミュニティ「ACOT」	中嶋 卓雄	産業工学部電子情報システム工学科
	佐松 崇史	産業工学部機械システム工学科
	井出口 健	産業工学部電子情報システム工学科
三保活性化プロジェクト	中山 隆雄	清水教養教育センター
阿蘇援農コミュニティプロジェクト	田中 孝幸	農学部応用植物科学科
福祉除雪プロジェクト	馬淵 悟	国際文化学部地域創造学科
ユニークプロジェクト		
障害者自立支援プロジェクト	尾崎 由佳	チャレンジセンター
	木村 英樹	工学部電気電子工学科
Tokai International Communication Club	森山 美紀子	外国語教育センター
TOKAI DESIGN PROJECT	池村 明生	教養学部芸術学科
	戸谷 毅史	教養学部芸術学科
	申 珠莉	教養学部芸術学科
バリアフリー推進プロジェクト	北野 康子	健康科学部社会福祉学科
	内田 匡	体育学部体育学科
	吉岡 尚美	体育学部生涯スポーツ学科
宇宙エレベーターレースチャレンジ	佐藤 実	理学部基礎教育研究室
アイスバンテオン・プロジェクト2011	粉川 牧	芸術工学部建築環境デザイン学科
	渡辺 宏二	芸術工学部建築環境デザイン学科
木工製作でおこなう社会貢献プロジェクト	笹川 寛司	芸術工学部くらしデザイン学科
takanawa共育プロジェクト	福崎 稔	高輪教養教育センター
Make Up Happyプロジェクト (MUHP)	東 恵子	開発工学部感性デザイン学科
肥後のたまもの	山崎 松男	総合経営学部マネジメント学科
LINK TH LOCAL	村上 祐治	産業工学部建築学科
あにまるれすきゅープロジェクト	森友 靖生	農学部応用動物科学科

5月28・29日 「プロジェクトコーディネーター能力開発研修会」を実施

コーディネーターとしてプロジェクトを円滑に運営し、学生たちのモチベーションを維持するために必要なスキルを身に付けることを目的とした研修会を開催しました。今回は各キャンパスより19人の職員が湘南キャンパスに集合し、「リフレクション(振り返り)」の活用を中心に、単に記憶を掘り起こすのではなく、「意味付け」を行って経験や成果を定着させることについて研修を行いました。初日には、今年度からプロジェクト活動に新たに導入した「振り返りシート」に関する説明、さらに本センター堀本麻由子講師が「振り返り」の方法や効用について講義し、「振り返りシート」を用いた実習を指導しました。2日目は、園田由紀子講師が「振り返りにつながる問いかけ」をテーマに、小さな問いかけの積み重ねが学びを深めるとして、その具体例と効果について講義。続いて尾崎由佳講師が「KJ法を用いた振り返り」と題して、課題を創造的解決に導くメソッド方法を紹介し、参加者によるグループワークを指導しました。

また、本研修会に先立ち、5月25日には、8キャンパスをTV会議システムで接続し「チャレンジセンターの発足とその意義」について説明を行う「コーディネーター事務研修会」も開催しました。



6月10日 「プロジェクトアドバイザーミーティング」を実施

5キャンパスのアドバイザーを対象に、2010年度チャレンジセンターの方針およびプロジェクトに関する概要説明を目的とした「アドバイザーミーティング」を2年ぶりに開催しました。「今、何故、集い力・挑み力・成し遂げ力を身に付けた人材を社会が必要としているのか」について大塚滋所長より、「アドバイザーの役割および運営ルール」について木村英樹次長より、「本センターの教育プログラム」について飯塚浩一次長より説明されました。TV会議システムを活用し、各キャンパスのアドバイザーに加え、本センター教員および付き教員の総勢30名が参加。アドバイザーからは「集い力・挑み力・成し遂げ力は一つずつ身に付く力ではない。活動において、どの力も等しく必要とされ、どの力も同時に身に付くものである。」と、プロジェクト学生の指導を通じた感想なども聞かれました。

10月18日 「プロジェクトコーディネーター中間研修会」を実施

コーディネーターが身に付けたいスキルとして要望の高かった「ファシリテーション」について研修を実施。「プロジェクト活動に役立つファシリテーション」と題し、人と人とが集う場で、互いのコミュニケーションを円滑に促進し、それぞれの経験・知恵を活かしながら、問題解決を導く方法について本センター堀本麻由子講師が講義しました。コーディネーターは、プロジェクトの会議において、活動の課題を明確にし、メンバーが会議の目的を共有できるための事前のサポートや会議進行を活性化させるための効果的な質問の投げかけなどについて学びました。TV会議システムを接続し、7キャンパス25名が参加。参加者から「会議は、コンテンツ(課題・行動プラン)とプロセス(場づくり・議論の流れ)で構成され、コーディネーターはプロセスをより重視して支援する必要があることが理解できた」などの感想が寄せられました。



2011年

2月21日 「プロジェクトコーディネーター・アドバイザー意見交換会」を実施

プロジェクト支援において役割の異なるコーディネーターおよびアドバイザーが集い、各自の支援状況および課題(悩み)を共有し合うことで、次年度にむけた教職協働による学生支援のさらなる充実を目的として開催されました。今回、初の実施となった意見交換会は、チャレンジプロジェクトが所属する5キャンパスをTV会議システムで結び、20人の教職員が参加しました。ファシリテーターを本センター堀本麻由子講師が務め、事前に実施されたアンケート結果を基に、双方のコミュニケーションの連携についてグループディスカッションを行いました。



2010年度のチャレンジセンターの活動

4月5日 「チャレンジセンターガイダンス」を開催

新入学生および在校生に対して、本センターならびに各プロジェクトを紹介し、参加を促すことを目的に開催。当日は学生運営スタッフが司会進行を行い、本センター所長 大塚滋教授からの入学を歓迎する挨拶に続いて、本センター次長 木村英樹教授からセンターについての説明がなされました。引き続き本センター次長 飯塚浩一教授と尾崎由佳講師がチャレンジセンター科目の解説をした後、2010年度採択を受けた湘南キャンパスを拠点に活動する9のプロジェクトと学生運営スタッフが活動紹介のプレゼンテーションを行いました。会場には例年の参加人数を大幅に上回る約1,200名の学生が集まり、熱心な様子で聞き入っていました。



4月17日 「科学技術チャレンジフェア2010」を開催

湘南キャンパスにて、文部科学省が制定する第51回「科学技術週間」の一環として開催。科学ライブショー「ユニバース」では、東京大学大学院理学系研究科附属天文学教育研究センターの半田利弘助教が壮大な宇宙の様子について解説しました。続いて東海大学学生ロケットプロジェクト・ライトパワープロジェクト・Tokai Formula Club・サイエンスコミュニケーターの4プロジェクトによる科学講座を実施。また「Tokai Challenger」の展示やデモ走行のほか、電気自動車、フォーミュラカー、ハイブリッドロケット、環境キャラバン隊のエコバス「天ちゃん号」等を展示。小学生を含めた近隣の市民や学生ら多数が参加し、熱心に質問したり実物を観察していました。



10月16日 「プロジェクト中間報告会」と「第7回チャレンジセンターセミナー」を開催

9つのキャンパスをTV会議システムで結び、約300名の学生が参加。本センターの教育目標である「集い力・挑み力・成し遂げ力」を踏まえて、13のプロジェクトの代表者が上半期における活動内容や反省点、今後の活動予定などを発表しました。質疑応答では、各プロジェクトに共通した問題点について、キャンパスを越えて活発な意見交換が行われました。また、学生運営スタッフ企画、運営によるセミナー「ターニングポイント～未来と今がつながる時～」も開催。産業カウンセラー・キャリアカウンセラーとして活躍中の水野秀則氏（有限会社フューチャサポート代表取締役）を講師に招き、社会人にとって必要なコミュニケーションについて講演していただきました。



2011年

1月29日 「電気自動車・燃料電池車・ソーラーカー製作講習会」を開催

日本太陽エネルギー学会との共催で、東海大学代々木キャンパスにて開催しました。当日は、学会に所属する研究者のほか、実際に各種のエコ電気自動車を製作し、レースなどに参加している大学や専修学校、高校などの学生や生徒ら約300人が参加。ヤマハ発動機の池上敦哉氏、本田技術研究所の初井基之氏、辻岡毅氏ら、第一線で活躍する研究者、技術者による研究発表や製作技法に関する講演に熱心に耳を傾けていました。イベント運営にはライトパワープロジェクトの学生たちが携わったほか、同プロジェクトアドバイザーの木村英樹教授が講演しました。



2月10日 チャレンジセンターの3チームが「2010年度松前重義賞」を受賞

松前重義賞は、学術、文化、スポーツの各部門で、建学の精神に基づく顕著な成績（業績）を収めた学園の教職員、学生、生徒、児童、園児および卒業生を顕彰するものです。「ライトパワープロジェクト」のソーラーカーチームは「サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジ」での2連覇、電気自動車チームは「2010ワールド・エコノム・ムーブ」燃料電池部門での3連覇が評価され、それぞれ文化部門（団体の部/大学・短大）の最優秀団体賞を受賞。「キャンパスストリートプロジェクト」のTCDIチームは「ひらつかビーチハウスプロジェクト」での「2010年度グッドデザイン賞」受賞が評価され、同優秀団体賞を受賞しました。



2月21日 「プロジェクト最終報告会」を開催

湘南をはじめ9つのキャンパスをTV会議システムで結んで、1年間の総括として活動の成果や課題、今後の展望などを発表。全国で336名の学生らが参加しました。

「成果の自慢ではなく、プロジェクトを客観的に検証して課題を自覚化し、情報を共有して、さらなる発展につなげることが目的です」という、本センター所長の 大塚滋教授による挨拶で開幕。登壇した各プロジェクトの代表者は、写真や図表を効果的に配したパワーポイントを用いて、制限時間内（7分間）での報告に臨みました。

この催しでは昨年度から来賓を招いて講評を頂戴し、学生たちがその後の活動に役立てられるようにしています。今年度は、前回もご出席いただいた東海大学連合後援会の田畑日出男会長、東海大学同窓会の中村宏会長に加え、初めて企業から人事担当や管理担当の方々にもご参加をいただき、学生のプレゼンテーション力に視点を置いた指摘や助言を頂戴しました。また今回から「ベストプレゼンテーション」賞を新設し、プレゼンテーションの優れたプロジェクト、3件を表彰しました。

企業からご参加いただいたのは、金網哲一氏（アンリツ株式会社人事総務部人事チーム部長）、橋本紳司氏（株式会社トーブラ管理総務課長）、櫻井清司氏（株式会社東芝システムL S I 事業部参事）の3名です。企業の方々からは共通して「制限時間に対して情報量が多すぎる」といった指摘があり、「さらに分かりやすくまとめる努力を」とのアドバイスがありました。金網氏からは「プロジェクトに参加して、苦勞を体験し、自分で考えて行動し、人の役に立てたと実感できたのであれば大成功。ぜひ振り返って」との言葉も寄せられています。また田畑会長は「成功例が目立ったが、失敗から学ぶことが多い。改善例を共有して、今後も頑張ってください」と述べ、中村会長は「社会に貢献することを目指し、夢をあきらめずに取り組んでほしい」とエールを贈りました。

また、湘南キャンパスの各プロジェクトの展示会や、Formula Car、電気自動車のデモンストレーション走行も実施。本センターの活動に対し、田中康夫副学長から学生に向けて激励のコメントも寄せられました。



「ベストプレゼンテーション」賞 受賞団体

- ▽ 福祉除雪プロジェクト（札幌キャンパス）
- ▽ Music Art Project（湘南キャンパス）
- ▽ キャンパスストリートプロジェクト（湘南キャンパス）



学びのテーマと振り返りシートの実施

『プロジェクト活動を通じて教育する』という本センターの教育理念のもと、2010年度から募集するプロジェクトに対し「活動を通じて、自分たちは何を、どのように学ぶか、を自主的によく考えているか」を新たな採択基準とすることにいたしました。具体的には、応募に際し、プロジェクトが本センターに提出する計画書に、『重視する学びのテーマ』を副題として記載する欄を設け、形式上は継続的な活動(例:コンテストへの参加・入賞を目指す)であっても、その「学びの姿勢」において、前年の成果・反省点を踏まえて、毎年の計画書に新しい「何を、どのように学ぶのか」をしっかりと盛り込んでい

るかを重視しました。さらに、チャレンジプロジェクト各メンバーに対し、この『重視する学びのテーマ』を踏まえ活動できているか、を振り返るために、プロジェクトコーディネーターの協力のもと『振り返りシート』を年3回実施することを義務づけました。これは、全4項目の質問で構成され、最後の項目は、プロジェクトコーディネーターが活動をサポートする上で、メンバーに現段階で最も必要であると思われる独自の問いかけを記載し、学生の「気づき」を促しました。

チャレンジセンター編集による書籍を初刊行

オーストラリア大陸3000kmを縦断する世界最高峰のソーラーカーレース「グローバル・グリーン・チャレンジ」2009年大会を制したライトパワープロジェクトの挑戦をまとめた書籍が、2010年6月、本センター編集・東海教育研究所発行により刊行されました。『世界最速のソーラーカー オーストラリア大陸縦断3000kmの挑戦』(1,470円 税込 A5判・136頁)と題したこの書籍は、これからの社会に必要とされる新エネルギー・省エネルギー分野における日本の最先端技術を終結したマシンの戦いと、新型ソーラーカー「Tokai Challenger」の開発から栄光のゴールまで、10か月におよぶ戦いの中、大きく成長したプロジェクトメンバーの貴重な記録となっております。



【主な内容】

- ・緊迫のレーススタート
- ・苦難続きのマシン開発
- ・赤土の大地での戦い
- ・栄光のゴールに向かって

チャレンジセンター所長賞の創設

本学は、2010年度学位授与式より「チャレンジセンター所長賞」を創設し、プロジェクト活動を通じて社会で活躍できる「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を身に付けた学生に対し、本賞を授与する運びとなりました。受賞要件として、

- ①チャレンジプロジェクトに加入して2年以上活動した者
(継続して加入・活動していなくても構わない)

- ②プロジェクトリーダーを務めた経験がある者

- ③本センター運営委員会が承認する「プロジェクト修了認定」を2回以上受けている者

- ④卒業後の進路が定まっている者

の4件を満たした学生が対象となります。初代受賞者として、5キャンパス11名の卒業生が選ばれました。

キャンパス名	氏名	プロジェクト名	リーダー経験年度
湘南キャンパス	瓜生 尚樹	Tokai Formula club	2008年度、2009年度
	高津 貴大	ライトパワープロジェクト	2007年度
	鈴木 一星	キャンパスストリートプロジェクト	2008年度
	早川 祐貴	病院ボランティアプロジェクト	2008年度
	飯沼 克昌	スポーツ社会貢献プロジェクト	2009年度
	田端 陽太郎	MusicArt Project	2008年度
札幌キャンパス	池田 翔	福祉除雪プロジェクト	2008年度、2009年度、2010年度
旭川キャンパス	浅田 知実	木工製作でおこなう社会貢献プロジェクト	2009年度
沼津キャンパス	樽林 正展	人と人をつなぐまち沼津	2009年度
熊本キャンパス	千葉 仁	先端技術コミュニティ「ACOT」	2010年度
	上尾 篤史	肥後のたまもの【農作物仲介サイト運営】	2008年度、2009年度

2010年度 プロジェクト活動報告

ライトパワープロジェクト	11
Tokai Formula Club	15
東海大学学生ロケットプロジェクト	17
キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)	19
環境キャラバン隊	23
Music Art Project (MAP)	25
サイエンスコミュニケーター	26
病院ボランティアプロジェクト	27
スポーツ社会貢献プロジェクト	28
先端技術コミュニティ「ACOT」	29
三保活性化プロジェクト	30
阿蘇農援コミュニティプロジェクト	30
福祉除雪プロジェクト	31

※参加人数は2010年5月現在のものです。

ライトパワープロジェクト

＜科学技術でグリーンエネルギー社会へ＞

光、人力などの少ないパワーで移動できる乗り物である「ソーラーカー」「電気自動車」「人力飛行機」を設計・製作し、国内外の大会に出場。レースだけでなく幼稚園児から高校生、一般までを対象とした「エコカー教室」や「ものづくり教室」を開催。また国際的な展示会へ出展し、技術力のアピールをするとともに地球環境を意識した環境啓発活動を行っています。

プロジェクトリーダー 伊藤樹 工学部 動力機械工学科 3年
 サブリーダー 河野友里子 工学部 精密工学科 2年 / 下崎友大 工学部 動力機械工学科 2年
 広報リーダー 江澤勇介 工学部 航空宇宙学科航空宇宙専攻 2年 / 会計責任者 下田剛史 工学部 電気電子工学科 2年

湘南
キャンパス

参加人数 76人
<http://deka.challe.u-tokai.ac.jp/lp/>

9月22日～10月2日

「サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジ」で総合優勝!



「South African Solar Challenge 2010(サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジ2010)」は、南アフリカ共和国で開催される、高低差約2,000m、走行距離4,000kmを超える、国際自動車連盟公認のソーラーカーレースです。本学は、2008年の前回大会に続く制覇となり、特別賞として「キング・オブ・マウンテン賞」も受賞しました。



学生リーダー・伊藤樹さん(工学部3年次生)

「タイヤのパンクやマイコンの動作不良といったトラブルも、みんなの力を合わせて乗り越えることができました。親切的な南アフリカの人々との交流や、壮大な風景に触れることができ、貴重な体験となりました。」

篠塚建次郎氏(ラードライバー:本学卒業生)

「細かいトラブルはしばしばありましたが、大きなトラブルにつながらないようにメンバーがよく頑張りました。大変過酷なコースを克服したことで、学生も良い経験を積むことができ、成長できたのではないかと思います」

チーム監督・木村英樹教授(工学部)

「さまざまな技術を結集した最先端のソーラーカーは、通常の乗用車と同等か場面によってはそれ以上の走行性能を、太陽光のエネルギーだけで実現可能であることを証明できたと思います」

大会レポート 優勝までの道のり

9月23日 レース1日目

ソーラーカーに似合う晴天。期待と不安の中でレースが始まりました。初めはスムーズに走っていたTokai Challengerでしたが、路上に落ちていた異物を踏み、走行中にパンク。チームメンバーの迅速な動きにより、スムーズにタイヤ交換が完了し、無事1日目のゴール地点に到着しました。



首都プレトリアをスタート。

9月24日 レース2日目

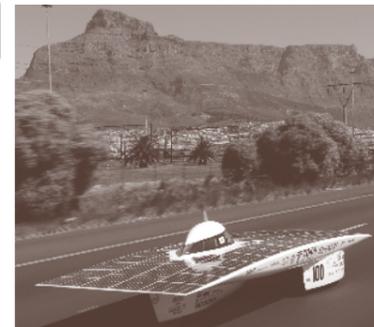
524kmの道のり、標高1000m以上の高地が続きます。道路工事に阻まれ一時ストップしたり、前日に続きパンクしたり、数々の問題が発生。走行距離1000kmを超えたところで、2日目のゴールを迎えました。



工事中によりストップ。

9月25日 レース3日目

残念ながら本日は曇り、発電が難しい状態が続きます。しかし、ケープタウンに近づくにつれて太陽が姿を現しました。今日は、急勾配からトンネルまで、厳しいコースプロファイル。にもかかわらずトラブルもなく、美しい風景を横目に颯爽と走行を続けました。



テーブルマウンテンを遠くに望む。

9月27日 レース4日目

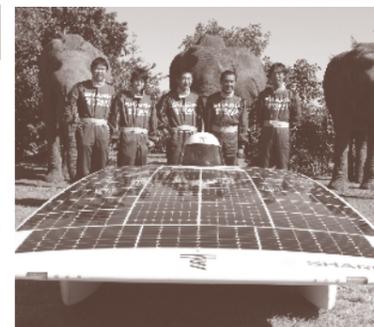
1日ケープタウンに滞在し迎えたレース開始4日目。初の雨天走行の中、思わぬピンチが私たちのチームを襲います。主催者側とのゴール地点の相違があり、レースの道をコースアウト。ゴールの近くだったため、カーナビでゴール地点を確認しなんとか辿り着きました。



充電中のTokai Challenger。

9月28日 レース5日目

朝刊にTokai Challengerが大きく掲載されているのを発見。現地では約70%の人がレースのことを知っているそうです。「エレファント・サンクチュアリ」では、アフリカ象と写真を撮影。マイコンの不調が発生しながらも、グレアムズタウンに無事到着しました。



ゾウとチャレンジャーとドライバー。

9月29日 レース6日目

本日の天気は晴れ。ここにきて検問中の地元警察に、Tokai Challengerが止められてしまうという珍事が起こりますが、すぐに確認が取れ、郊外までポリスカーが先導してくれました。チャレンジャーは今までで最高の600kmの道のりを走りきり、コックススタッドへと到着しました。



警察に説明中。

9月30日 レース7日目

この日は標高1300mポイントから一気にベイサイドまで下ります。片側1車線の区間では遅い車にソーラーカーが捕まり、思うように速度が出せませんが、その後圧倒的な速さで後続を引き離し、走行区間が短かったこともあり12:55にはリチャーズベイに到着しました。



スタート前の車体整備。

10月1日 レース8日目

標高0mから1800mへ、そしてダウンヒルもある高低差の激しい道が続く中、フロント右タイヤのパンク、ホイール・スパッツ破損、リアタイヤのパンクと、トラブルが相次ぎます。しかし、チーム一同レース中に培った力を発揮し最短時間でトラブルを解決。ゴールを目前に、最後の力を振り絞ります。



パンクのため、タイヤ交換中。

10月2日 レース9日目

最終日の天気は快晴。最後のドライバーは篠塚建次郎さんに託します。チームメンバーが緊張する中、幾多の困難を乗り越えて、終着地点のプレトリアへ到着。走行距離4061.8km、走行時間45:05、平均速度90.1km/h、新記録での優勝でした。



無事に南アフリカ1周完了。

10月20日

駐日南アフリカ共和国大使館で優勝報告会を開催



駐日南アフリカ共和国大使館を訪れ、ガート・ヨハネス・グローブラー特命全権大使に優勝を報告しました。閣下から「日本と南アフリカの交流100周年を祝う記念の年に優勝したことをとてもうれしく思います。大使館としても、レースを通じて東海大という素晴らしい大学と交流を深めることができましたことは非常に意義深いことです。今後とも交流を深めていけることを願っています」とお祝いの言葉をいただきました。

5月3・4日 「2010ワールド・エコノ・ムーブ」燃料電池部門で三連覇達成

秋田県大潟村ソーラースポーツラインで開催されたレースに、本プロジェクトは、燃料電池の利用技術をもつて新たに開発した燃料電池制御システムを、「ファラデーマジック2」に搭載して出場。2008・2009年度に引き続き優勝し、三連覇を達成しました。



5月13～16日 「第5回ロハスデザイン大賞2010 新宿御苑展」にソーラーカーを出展

「Become a Green Shopper! 幸せにつながる、グリーンな選択を!」をテーマに、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを行っている人物や商品などを表彰する「ロハスデザイン大賞2010」。その120点のエントリー作品のひとつとして「Tokai Challenger」を展示しました。



5月22日 「中学生ものづくり教室」でTokai Challengerを展示

次世代のものづくりを担う子どもたちの育成を目指す一環として、愛知県立時習館高等学校にて開催。3回の講座のうち1回目となる22日には、豊橋市内の中学生24人が参加。木村英樹教授による「オーストラリア大陸3000キロ横断の夢」をテーマとした講演も行われました。



6月5日 Tokai Challenger が「第5回ロハスデザイン大賞」を受賞

「Tokai Challenger」は、「モノ部門」において、投票総数27,152票中2,013票の投票を獲得し大賞を受賞。東京・丸の内丸ビルホールで行われた表彰式にて、ボルネオ保全トラストジャパン理事・旭山動物園園長の坂東元氏より表彰状とトロフィーが授与されました。



7月14日 「ソーラーカー・電気自動車を利用したエコカー教室」を開催

湘南キャンパスにおいて、秦野市立大根小学校4年生124名を対象に開催。「Tokai Challenger」をはじめとする2台の電気自動車を用いて、車体内部を見ながらの解説とデモ走行を実施。その後、本プロジェクトメンバーと、アドバイザーの木村英樹教授による講義を行いました。



7月24・25日 「第33回鳥人間コンテスト」に出場

琵琶湖東岸(滋賀県彦根市)で開催される「第33回鳥人間コンテスト選手権大会」に「人力プロペラ機タイムトライアル部門」に出場。設計から製作まで全てのプロセスを学生のみで取り組んだ人力飛行機「FENNEL」で挑戦しました。



7月31日 「ものづくり教室」を開催

湘南キャンパスにて、鶴巻小学校(神奈川県秦野市)の児童を対象に、子どもたちの理科離れを抑制し、ものづくりの楽しさを知ってもらうことを目的として開催。小学生18名とその保護者10名が参加し、本プロジェクト活動紹介の後、ゴム動力飛行機や紙飛行機を製作しました。



8月28・29日 新宿御苑GTF (グレーター トウキョウ フェスティバル) グリーンチャレンジのつどい2010」に出展

本イベントは単に環境問題を取り上げるのではなく、生き物との共生がどれだけ必要かということを実感する新しい形の体感・体験イベントで、本プロジェクトは、ソーラーカー「Tokai Spirit」を出展。夏休みということもあり小学生の子どもや外国人の方々など大勢の方が訪れました。



9月4日 ジャンプSQで「曇天・プリズム・ソーラーカー」連載が開始

集英社が発行する月刊誌「ジャンプSQ。(ジャンプスクエア)10月号」において、ライトパワープロジェクトおよびアドバイザーの木村英樹教授が取材協力を行った新作「曇天・プリズム・ソーラーカー」の連載がはじまりました。



10月22日 厚木基地の小学校でソーラーカーを紹介

米海軍厚木航空施設で実施された「Energy and Water Conservation Program」において、基地内の小学校の児童約150名を対象に、ソーラーカー「Tokai Spirit」の展示と解説を実施。参加した児童らは実物のソーラーカーを見ると歓声を上げて喜び、次々に質問をしていました。



12月9～11日 「エコプロダクツ2010」に出展

東京都江東区の東京ビッグサイトで開催された「エコプロダクツ2010」に、本プロジェクトと環境キャラバン隊が出展しました。この催しは企業や地方自治体、大学などエコロジーにかかわる約750の団体が参加し、最先端のエコプロダクツやサービスを紹介する日本最大級の環境展示会です。今年は「グリーン×クリーン革命! いのちをつなぐ力を世界へ」をテーマに開催され、期間中には約18万名が来場しました。本プロジェクトはシャープ株式会社のブースで、「Tokai Challenger」を展示しました。



10月13日 「平成22年度 県・横浜・川崎・相模原四首長地球温暖化防止表彰」を受賞

エネルギー問題にかかわる電気自動車やソーラーカー、人力飛行機の技術レベルの向上を図るとともに、小・中学生などを対象とした「エコカー教室」や「ものづくり教室」といった環境教育を行う啓発活動が評価され、ワークピア横浜で行われた表彰式で表彰されました。



11月28日 財団法人 宇宙少年団を対象に「ものづくり教室」を実施

日本宇宙少年団は、子どもたちを対象に宇宙および科学に関する教育実践活動や国際交流を実施している団体です。湘南キャンパスにて開催されたイベントには、藤沢分団22名、横浜分団91名の子どもと保護者が参加。ゴム動力飛行機を作成し、その飛行距離を競う競技等を行いました。



12月18日 「HABATAKI～ものづくりは気軽に理科を体験できる～」を開催

「空、飛ぶ」というキーワードをもとに自衛隊と協働し、湘南キャンパスにおいて開催。大根小学校(秦野市)、金目小学校、みずほ小学校(以上、平塚市)の児童73名とその保護者28名を対象に行われ、「ゴム動力羽ばたき機」の製作をとおり、ものづくりへの興味を深めました。



Tokai Formula Club

湘南
キャンパス

＜学校では体験することができない ものづくりを通し人々にものづくりの楽しさを伝え、社会に貢献できるエンジニアを目指す＞

世界7カ国で行われているFormula SAE競技に参加するために、チームで考えたコンセプトに沿った車両を製作。製作技術はもちろん、作業内容を各グループでスケジュール通りに進めていくマネージメントまで、活動を通して得た知識を生かして、社会に貢献できるエンジニアになることを目指します。また、多くの人々にものづくりのすばらしさを知ってもらうため、製作した車両の展示、解説も行っています。

プロジェクトリーダー 都築義幸 工学部 動力機械工学科 3年
サブリーダー 買來大介 工学部 動力機械工学科 2年
広報リーダー 坂元一星 工学部 動力機械工学科 2年 / 会計責任者 山口大地 工学部 動力機械工学科 3年

参加人数 58人
<http://formula.shnu-tokai.ac.jp/>

6月6日 「湘南ヒストリックカークラブミーティング (SHCCミーティング)」に参加

大磯ロングビーチ (神奈川県大磯町) で開催されたSHCCミーティングに参加しました。本イベントは、1969年までの生産か、大会主催者に承認された車両のみが参加できる、ジムカーナ形式の競技大会です。競技に出場した車両は約80台、約300人の観客が集まる中、本プロジェクトは特別枠として参加。競技と同じコースにおいて2009年度に製作したマシン「TF2009」がデモ走行を実施し、全競技中トップタイムとなる45秒8のスコアを記録、会場の参加者からは驚嘆の声が上がりました。また、TF2009と本年度の新規車両TF2010を展示し、本プロジェクトの活動内容や、マシンパーツについての解説を行いました。



7月3日 「学生フォーミュラ車輛テスト走行会」に参加

エコパ (小笠山総合運動公園・静岡県) にて開催された学生フォーミュラ車輛テスト走行会に参加しました。本イベントは、「第8回全日本学生フォーミュラ大会」に参加を予定している8大学が参加し、実際に使用されるコースで試走を行う催しです。雨天の中、本プロジェクトは大会出場車両「TF2010」を用いて5周1タームとした試走を5回行い、1周最高1分4秒という参加校中トップタイムを記録しました。これは昨年度の最速タイムも上回るものとなりました。参加したメンバーは、「雨の中新しいパーツを装着してのテスト走行ができ貴重な経験になった」と感想を述べ、また、大会車検で問題になる箇所指摘を受け、「本番に向けてさらに車体の調整を進めたい」と語っていました。



7月30・31日 「キッズエンジニア2010」に出展

パシフィック横浜で開催された体験型学習イベント「キッズエンジニア2010」に出展しました。本イベントは小学生を対象として自動車を中心とする様々な分野の科学技術やものづくりの楽しさに触れ、科学への興味関心を深め、日本を支える技術者を育成することを目的に開催されました。会場は、車の技術について学べる「教室プログラム」と「展示プログラム」エリアに分かれ、約30の企業・団体が出展。約6,500人が来場し賑わいを見せていました。本プロジェクトは「展示プログラム」で、フォーミュラカーの展示と試乗会を実施。大勢の小学生と保護者が訪れ、子どもたちはフォーミュラカーに興味津々で、マシンの運転席に座ると、嬉しそうな表情を見せていました。



8月2~4日 富士スピードウェイで「試走会」に参加

富士スピードウェイ (静岡県) で開催された社団法人自動車技術会 関西・関東・中部支部合同主催によるフォーミュラカー試走会に参加しました。本イベントは、「第8回 全日本学生フォーミュラ大会」に参加する同3支部エリアの参加チームを対象として、日本大会同様のコースを設定、走行し、マシンの調整および技術向上の機会とするものです。今回は30チームが参加。本プロジェクトからはメンバー30人が参加して、「TF2010」で試走を実施。参加したメンバーは、「大会本番にベストの状態に参戦するためにやらなくてはならない事を明確にすることができました。残された期間はわずかですが、ドライバーの走行練習とマシンの改善に全力を注ぎたいと思います」と感想を述べていました。



9月7~11日 「第8回 全日本学生フォーミュラ大会」で総合5位に入賞

エコパで開催された「全日本学生フォーミュラ大会」に出場しました。本大会は、学生がチームを組み企画・設計・製作したフォーミュラスタイルの小型レーシングカーを持ち寄り、車の走行性能および車両コンセプトや設計、コスト審査などものづくりの総合力を競うもので、自動車技術ならびに産業の発展に貢献する人材を育成することを目的として2003年から開催されており、プレゼンテーションなどの静的審査、加速やハンドリング、燃費などの動的審査、および各競技の得点で評価がなされました。今大会では日本各地の大学生チームのほか、中国や韓国、ドイツ、インド、タイから過去最多となる全85チームがエントリーし、75のチームが書類選考を通過。チーム1,382名、スタッフ297名、ゲスト1,389名、プレス101名、合計3,169名が参加しました。



TFCからは、59名のメンバーが参加し、3年生メンバーが2年間かけて一から作りあげた新規車両「TF2010」で参戦。エンデュランス (直線・ターン・スラローム・シケインなどによる周回路を約22km走行し、走行時間によって車の全体性能と信頼性を評価) 4位、総合5位となり、総合優秀賞に入賞することができました。参加したプロジェクトメンバーは、「5位という成績は、メンバーのみでは到底手にすることはできません。今までTFCを築き上げ、支えてくださった先輩方、ついてきてくれた後輩、いつも気にかけてくださった先生や友達、支援していただいたスポンサーの方々、他プロジェクトメンバー、そしていつも見守ってくれた家族、多くの方々の力があってここまでたどり着くことができました。本当にありがとうございました。」と感謝を述べました。



11月28日 「第44回湘南ヒストリックカークラブ大磯ミーティング」に出展

大磯ロングビーチで開催された「第44回SHCC大磯ミーティング」に出展しました。本イベントは、湘南エリアを中心に活動している古い車のクラブ「湘南ヒストリックカークラブ」主催によるもので、本プロジェクトは同クラブより招待を受け、第33回より特別枠として参加させていただいています。競技に出場した車両は約100台、会場には約300人の観客が集まりました。本プロジェクトはマシントラブルによりデモ走行は実施せず、展示と運営補助を行いました。会場を訪れた方々からは、活動内容やマシンパーツについてなど、数多くの質問を受けました。参加したメンバーは、「次回はマシンを走行させられるよう調整を行いたい」と抱負を述べていました。



東海大学 学生ロケットプロジェクト

湘南
キャンパス

<もの造り>

工学的な知識・技術やプロジェクトマネジメント・チームワークを身につけることを目標として、ハイブリッドロケットという種類のロケットの設計・製作・打ち上げ・解析などを行うプロジェクトです。活動は4つの技術系の班と4つのマネジメント系の班に分かれ、ものづくりの総合的な力を養います。日本全国の宇宙を志す学生や社会人との交流を通して、自分の世界観を広げ多種多様な考え方に触れることもできます。

プロジェクトリーダー 丸山 信也 工学研究科 航空宇宙学専攻 1年
サブリーダー 小林 直樹 工学部 機械工学科 3年 / 小谷 彬 工学部 航空宇宙学科航空宇宙学専攻 2年
広報リーダー 大崎 大 工学部 航空宇宙学科航空宇宙学専攻 3年 / 会計責任者 榎本 地大 工学部 航空宇宙学科航空宇宙学専攻 4年

参加人数 51人
<http://www.ea.u-tokai.ac.jp/srp/>

7月25日 「大学宇宙工学コンソーシアム総会」に出席

本プロジェクトが加盟する特定非営利活動法人 大学宇宙工学コンソーシアム (UNISEC) の第8回年次総会が東京大学で行われ、本プロジェクトメンバー13名が出席しました。

UNISECは大学・高専学生による手作り衛星やロケットなどの実践的な宇宙工学活動を支援することを目的として活動しており、今回の総会には一般参加者49名を含む総勢197名が参加。開会の挨拶に続いて、本年度

学生理事を務める慶応義塾大学の梯 友哉さんと、本プロジェクト昨年度リーダーの神保 明菜さん(工学部航空宇宙学科)が挨拶をしました。今回の総会では、5月21日に種子島宇宙センターからH-IIAロケット17号機によって打ち上げられた金星探査機「あかつき」(PLANET-C)に相乗した世界初の大学開発の深宇宙衛星「UNITEC-1」をはじめとする、小型衛星を中心とした講演が中心となりました。

8月19日～22日 「能代宇宙イベント」で打ち上げに成功

秋田県能代市で行われた「能代宇宙イベント」に参加し、ハイブリッドロケットの打ち上げ実験を実施。本イベントは、日本最大規模の学生と社会人によるロケット打ち上げおよび自律ロボット制御のアマチュア大会です。本プロジェクトは8月19日(木)のハイブリッドロケット打ち上げ部門に参加。同日17時47分、学生が設計、製作したハイブリッドロケット「H-22」(全長1640mm、重量6.67kg)を打ち上げ、頂点にて分離および缶サット(缶ジュース程度の大きさの人工衛星)の放出に成功。簡易解析の結果、到達高度は336mを記録したことが判明しました。また、本プロジェクトメンバーは他大学のハイブリッドロケット打ち上げ支援を行い、22日のイベント一般公開日ではこれまで打ち上げたロケットをパネルで紹介するとともに「H-22」の機体や搭載計器を展示しました。



9月18日・19日 「宇宙開発フォーラム2010」に出展

東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)武田ホールで開催された「宇宙開発フォーラム(SDF)2010」に出展しました。フォーラムは、多様化する宇宙開発に対応する人材育成のため、文系・理系を融合する形で技術や知識を習得する機会や、宇宙開発に関わる契機を提供することを目的として、2003年から毎年開催されています。本プロジェクトは「能代宇宙イベント」において打ち上げを行った「H-22号機」の実機を展示したほか、パネルおよび口頭で活動を紹介しました。参加したメンバーは「普段触れることのない宇宙基本法に関する講義や、今後の宇宙開発について議論しあうワークショップに参加することができ、非常に充実した2日間でした」と感想を述べています。



9月21日 「ロケット教室」を開催

国府台女子学院小学部(千葉県)の科学クラブに所属する児童約20名を対象に「ロケット教室」を開催しました。本企画は、本学同窓会 堀幸次郎氏のご息女が昨年度の建学祭でTSRPのモデルロケット打ち上げ体験教室に参加され、興味を持ったことをきっかけに実現しました。「ロケット教室」では、ロケットの仕組みや打ち上げについて、プロジェクトの紹介を交えながら解説。機体やエンジンを展示し、実際に触ってもらったほか、モデルロケットの打ち上げも行いました。参加した小学生の皆さんは、ロケットが身近な素材を使って作られていることに驚いた表情を浮かべ、また、実際にパーツに触れる体験ではとても楽しそうな様子でした。



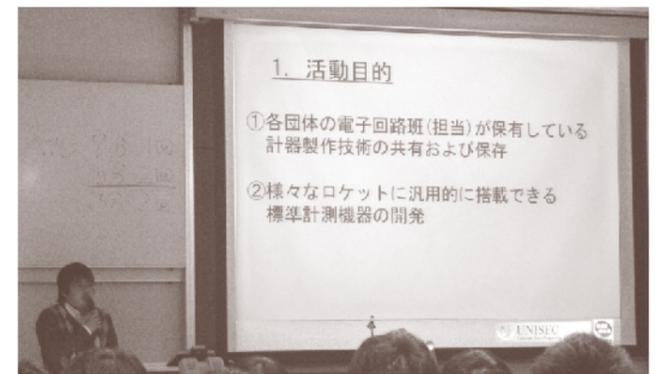
10月3日 「ロケット教室」第2弾を開催

9月21日に行った「ロケット教室」が、大変ご好評いただいたことを受け、国府台女子学院小学部(千葉県)の学園祭において、再度「ロケット教室」を開催しました。今回の教室では、ロケットについての解説と活動を紹介するパネルの展示、モデルロケットの打ち上げ体験を実施しました。会場には学園祭ということもあって子どもから大人まで大勢の方が訪れ、打ち上げ体験では6組12人定員の予約がすぐに埋まりました。体験した皆さんや周囲で見学する人たちにとても大好評で、モデルロケットが打ち上がるたびに大きな歓声が上がりました。展示ブースでは実際にロケットに触れることもでき、見学者の皆さんは興味深い様子でした。



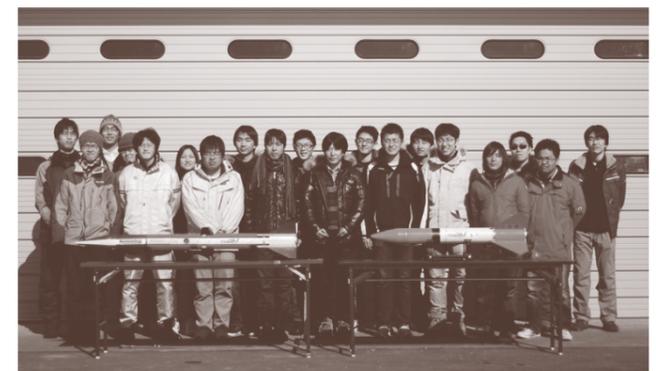
12月11日・12日 UNISECワークショップでポスターセッション賞受賞

本プロジェクトが加盟する特定非営利活動法人 大学宇宙工学コンソーシアム (UNISEC) 主催の第9回UNISECワークショップが香川大学(香川県高松市)において開催され、本プロジェクトメンバー5名が参加しました。UNISECは大学・高専学生による手作り衛星やロケットなどの実践的な宇宙工学活動を支援することを目的として活動しており、本プロジェクトはポスターセッションにおいて活動の中間報告を行ったほか、ロケット団体の電子機器グループによる共同開発の進捗状況についても発表しました。また、閉会にあたって各団体による投票が行われ、ポスターセッション部門においてTSRPが1位の「ポスターセッション賞」に輝き、賞状とトロフィーをいただきました。



2011年3月3・4日 「第9期ハイブリッドロケット打ち上げ実験」を実施

北海道広尾郡大樹町多目的航空公園において、ロケット打ち上げの高高度化を目指すための技術実証を目的として、ハイブリッドロケットH-23号およびH-24号の打ち上げ実験を実施しました。今回の実験には18名のプロジェクトメンバーが参加。H-23号は3月2日(水)に打ち上げを予定していましたが、積雪や燃料システムのトラブルにより3日(木)に延期。同日16時4分に無事打ち上げ、搭載していた全ての電子機器(標準計器・振動計・ビーコン)からのデータ取得およびビーコンによる打ち上げ機の回収に成功しました。H-24号は4日(金)11時30分に打ち上げ予定でしたが、発射に必要なガスが漏れるトラブルが起き、材料である亜酸化窒素を使い切ってしまったため、打ち上げを断念しました。



キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)

湘南
キャンパス

<この街の魅力を創造・発見・発信するために「企画力」「運営力」を学ぶ>

地域住民と学生が協働したイベントを企画・運営する「イベントチーム」、地域のお店や学生を載せたコミュニケーションペーパーを作成する「ThLive!チーム」、ビーチハウスを建設し、行政、市民、学生の三者による「まちづくり」について提言・実践を行っていく「TCDIチーム」。これら3つのチームが総合大学ならではの幅広い知識を活用し、地域活性化活動に取り組んでいます。

プロジェクトリーダー 宮田いずみ 文学部 心理・社会学科 2年
 サブリーダー 石塚栄樹 工学部 建築学科 4年 / 谷崎良介 工学部建築学科 4年 / 越野裕佳子 文学部 ヨーロッパ文学科 4年
 広報リーダー 井坂美貴 工学部 建築学科 2年 / 会計責任者 植松郁恵 文学部 心理・社会学科 2年

参加人数 93人
<http://deka.challe.u-tokai.ac.jp/cap/>



<写真撮影:今村壽博>

8月5日~31日 「ビーチハウスプロジェクト2010」を実施

本企画は市民と共に平塚の魅力を再発見し、理解することを目標とし今年度で4年目を迎え、TCDI(東海大学コミュニティデザイン研究体)チーム総勢約50名の学生が中心となり、湘南ひらつかビーチパーク横にビーチハウスをオープンし、市民参加型の様々なイベントを開催しました。

今回のテーマは「砂浜のスタジオ」。スタジオにはアーティストの職場という意味があり、ビーチハウスを「創り出す場」として位置付け、人と人との間にも親密な関係を生み出す空間づくりを目指しました。また「珊瑚ドーム」と題した独特なフォルムは、海の中で魚が集まる珊瑚のように、平塚海岸の夏のランドマークとして多くの人々を迎えました。期間中は週ごとに「デザイン」「シーサイド」「自然」「音楽」のテーマを設け、ビーチチェアの作成や写真展、漁船に乗って定置網を見学するなど様々なイベントを開催。11の団体と協働し、家族づれを中心に約570名の方に参加していただきました。



◆来場者からの声

「毎年来ているのでこれからも続けてほしい」
 「イベントが楽しかった。子どもたちがイキイキしていた」
 「デザインがおしゃれ。ユニークな構造に感心した」
 「イベント終了後も何かに使ってほしい」
 「やっていることの魅力をもっとアピールしてほしい」

◆プロジェクトメンバーの感想

「去年も見学に来たという方が多くいらっしゃり、多くの市民にこのプロジェクトが認識されつつあると感じました」
 「地域住民の方から解体を惜しむ声が聞けたことはとても嬉しかった。」
 「地元の見慣れた通りも写真展に展示するととても良く見えておっしゃっていました。地域の方にとっても、魅力を見出すきっかけとなったのではないかと感じました」



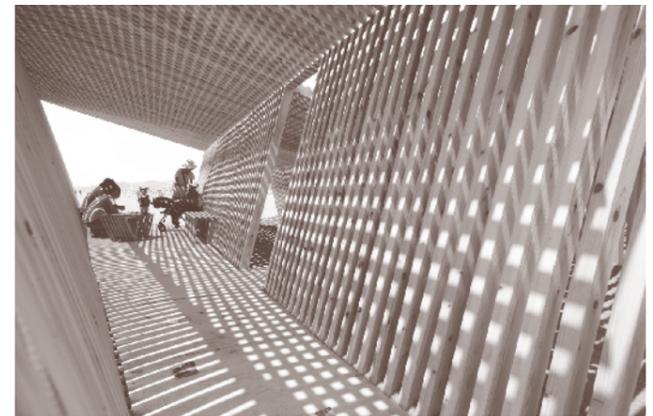
「2010年度グッドデザイン賞」を受賞



<写真撮影:今村壽博>

昨年実施した「ひらつかビーチハウスプロジェクト」の活動が評価され、「2010年度グッドデザイン賞」(主催:財団法人日本産業デザイン振興会)を受賞しました。

今回受賞した作品は、工学部建築学科の学生が中心となり、神奈川県産の木材等を使用しながら新たな木質構造を取り入れるなど、独自の技術とデザイン力を活かして設計・建設した点、学生と平塚市民が協働で地域の活性化に貢献している点、さらに2007年から毎年継続して活動が行われている点などが高く評価されました。



【受賞概要】

<受賞対象名>東海大学チャレンジセンター・キャンパスストリートプロジェクト
 TCDIチーム [ひらつかビーチハウスプロジェクト2009]
 <事業主体名>東海大学チャレンジセンター
 <領域/分類>社会領域-まちづくり・地域づくり
 <受賞者>東海大学チャレンジセンター・キャンパスストリートプロジェクトTCDIチーム
 <受賞番号>10D08003



■グッドデザイン賞(Gマーク)とは
 1957年に通商産業省によって設立された「グッドデザイン選定制度」を継承し、1998年より財団法人日本産業デザイン振興会の主催事業として運営される日本で唯一の総合的なデザイン評価・推奨制度です。これまで50年以上にわたって新しい時代の文化と生活を創造することを目的に「より豊かなライフスタイル」と「良いビジネス」を導く運動として展開され、のべ受賞件数は35,000件以上にのぼり、今日では国内外の多くの企業や団体が参加しています。また、グッドデザイン賞受賞のシンボルである「Gマーク」はすぐれたデザインを示す象徴として広く一般に親しまれています。



「AIA(アメリカ建築家協会) Japanデザイン大賞(学生部門)」を受賞

日本各地の大学86作品の応募の中から「2010年アメリカ建築家協会デザイン大賞(学生部門)」(AIA日本支部主催)を受賞。構造体がむき出しとなるユニークな形状の提案であること、学校のカリキュラムでは学べない建築の側面である設計図作成、申請、地権者や行政との協議などに学生が主体となって取り組み実現したことに対して高い評価を受けました。

プロジェクトメンバーの瀬谷匠君は「建築の面白さや奥深さ、プロジェクトを成し遂げる難しさを知ることができました。また、様々な企業の方や市民の方に認知され評価していただいたことは大変嬉しく、私たちの財産になったと思います。社会に出た際の企画立案や建築設計、都市計画にこの経験を活かしていきたいと思っています」と述べました。



6月29日
～7月2日

「TOKAI音食WEEK」を開催

湘南キャンパスの噴水周辺に特設会場を設置して、「TOKAI音食WEEK」を開催しました。この催しは「音楽を聴きながら食を楽しむ場」を創り、学生や地域の方々が触れ合える機会を提供するために開催された地域交流イベントです。

今年は「この街の魅力の創造・発見・発信」を活動テーマに、この街ならではの「食」と、本学学生、教職員、地域住民有志によるライブパフォーマンスの「音」をコラボレーションさせた場を4日間にわたって提供しました。

期間中は湘南キャンパスの学生をはじめ近隣住民ら約2万人が訪れ、地域のお店のおいしいものを食べながら、ライブステージを観覧するなど、イベントを楽しんでいる姿が見られました。

5回目を迎えた今年は、初の試みとしてC.A.P.の特設ブースを設け、来場者からアンケートを集めると同時にC.A.P.の活動を紹介しました。アンケートでは、「街に活気が出るのでいい機会だと思う」「地域だけでなく、多くの人と交流できるのが魅力」「近隣住民も音楽などを楽しめた」「子どもがいるので、ぜひ参加させたい」など、多くの意見が寄せられました。



10月2日

「第13回全国ボランティア学習研究フォーラム東京大会」に参加

国立教育政策研究所・社会教育実践研究センター（東京都台東区）で開催された本研究フォーラムは、世界的な流れであるボランティア活動の教育力とその可能性に目を向けることを目的として日本ボランティア学習協会が主催したものです。今回のフォーラムでは、学校教育や社会教育が「市民社会」とつながり、人々の潜在的な人間力、社会力、学習力を発掘する事を目標にしており、会場には学生や大学関係者らが数多く集いました。

C.A.P.は、「大学生らしさを生かした地域住民との交流」と題して、湘南キャンパス周辺の地域活性化活動を紹介。経済的に発展する活性化ではなく、コミュニケーションを通じた地域活性が重要であることを提言しました。また、活動に際しては企画力やリーダーシップ、マネジメント力など高度な能力が必要であり、活動を通してチャレンジセンターが掲げる「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」といった社会的実践力を身につけられるよう、課題に取り組んでいることを報告しました。



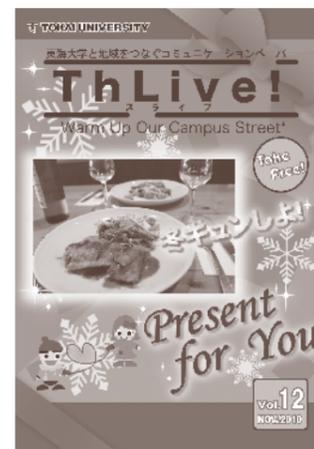
11月29日
2011年
3月18日

地域の魅力を紹介した冊子「ThLive! Vol.12、13」を発行

ThLive!(スライブ)とは、thrive(繁栄する、栄える)と、live(住む、生きる)を合わせた造語で、湘南キャンパス周辺地域との交流を深め、キャンパスストリートの活性化と、地域や学生の魅力を発見・発信することを目的としたコミュニケーションフリーペーパーです。

Vol.12のテーマは「冬キュン」。冬だからこそ提案したいシーンやおすすめスポットを取り上げ、クリスマスシーズンをより楽しく過ごしていただけるような情報を盛りだくさんに掲載しました。

Vol.13のテーマは『ちょっとのぞいてみよう～あえて行かないいけないスポット～』。読者の興味・関心を引き出すことを目的として、学内や地域でもまだ行ったことのない場所や、気になるけれど入れない、見ることができない場所の調査・取材を行いました。



12月6日
～25日

「東海大学クリスマスU-night!」を実施

湘南キャンパスと東海大学前駅周辺をイルミネーションやクリスマスツリーなどで彩る「東海大学クリスマスU-night!」を実施しました。

本企画は、大学と地域をクリスマスの装飾で彩り、地域の皆様と一緒にクリスマスの雰囲気を楽しむことを目的としたものです。

期間中は湘南キャンパスのシンボルである1号館の鉄塔をライトアップすると共に、東海大学前駅前広場にはクリスマスツリーとクリスマスまでのカウントダウンカレンダーを設置。通りがかった人々が足を止めて写真を撮る姿も多く見られました。また、駅前商店街から大学までのキャンパスストリートも、1号館のシルエットがデザインされた街灯フラッグで繋ぎ、街全体をクリスマスの雰囲気に盛り上げました。

さらに「身近なモノであったかクリスマス」をコンセプトに、学内外で科学教室を開催しているチャレンジセンターサイエンスコミュニケーターの協力のもと、ミョウバンの結晶と光ファイバーで作製する「手のひらツリー作り」や、地域の洋菓子店を講師に招く「クリスマスカップケーキ作り」、そして大学周辺のお店から提供された廃油を利用する「エコキャンドル作り」の3つのワークショップを実施。大根幼稚園の園児も参加し、大変盛況でした。



環境キャラバン隊

〈身近にできるエコを伝える環境啓発活動〉

神奈川県内の小学校や高校、地域での環境教室による環境啓発活動のほか、夏期・春期休暇を利用し、西日本の各地と関東近県でも環境教室を行っています。また、今年から新たに、本学学生を対象に「天ぷら油の回収」の呼びかけを企画。回収した油は、地元NPOとの提携により、バイオ燃料に精製し、「天ちゃん号」に利用することで、「身近な努力が環境に貢献すること」を目指しています。

プロジェクトリーダー 星川 旭 政治経済学部 政治学科 3年
サブリーダー 山田 秀 教養学部 国際学科 3年 / 山崎 拓也 教養学部 人間環境学科 2年
広報リーダー 勝間田 惟 教養学部 人間環境学科 2年 / 会計責任者 白石 綾 教養学部 人間環境学科 2年
参加人数 32人
<http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/caravan/>

湘南
キャンパス

9月13日～17日 「夏季キャラバン」を実施



エコバス「天ちゃん号」で小学校を訪問し、身近な環境問題を考え、「身近なエコ」を広める夏季キャラバンを実施しました。本企画で移動に利用するエコバス「天ちゃん号」は、大学所有のマイクロバスを使用済み天ぷら油などを使用した廃食用油やバイオディーゼル燃料で走行出来るように本プロジェクトメンバーが改造したものです。

今季は、近隣地域の方々に本プロジェクトの活動を知ってもらい、交流を深めることを目的として、秦野市立渋沢小学校、平塚市立みずほ小学校、伊勢原市立成瀬小学校、相模原市立東林小学校を訪問し「環境教室」を実施しました。そこでは小学生が理解しやすいようメンバーの5人が「エコレンジャー」に扮し、石油枯渇問題や地球温暖化などの環境問題に立ち向かう環境劇を披露。合わせて、バイオ燃料についての解説や「天ちゃん号」への試乗、廃天ぷら油を燃料化する過程として湘南キャンパスの学生食堂から出た廃食油をろ過する作業を行いました。

4校合わせて420名の小学生が参加し、「バスは自分達で改造したのか?」「他にどのような身近に出来るエコがあるのか?」といった質問が挙がるなど、熱心に学んでいました。



2011年 2月22日～25日 「春季キャラバン」を実施

今季キャラバンでは、プロジェクトメンバー14名が東海大学附属小学校（静岡県）、伊勢原市立石田小学校、小田原市立桜井小学校を訪問。メンバー扮する5人のエコレンジャーが石油枯渇問題や食べ物の大切さ、ゴミのリサイクルなどの環境問題に立ち向かう環境劇や、バイオ燃料についての解説、「天ちゃん号」への試乗、廃食油のろ過体験、遊びながらエコを学べる「地球を救おうゲーム」を盛り込んだ「環境教室」を実施しました。



6月6日 「第5回若者と区民の環境会議」に参加

本会議は武蔵大学(東京都練馬区)で開催され、練馬区内の中学、高校、企業、行政が地球温暖化対策や生物多様性の保全・再生の事例についてプレゼンテーションし、さらに効果的な環境保全活動、持続可能な社会づくりを促進することを目的としたものです。本プロジェクトは昨年開催された「ecocon」入賞をきっかけに招待を受け、「廃油自動車による全国環境教育キャラバン」をテーマに、環境劇「エコレンジャー」を披露しました。



10月24日 「第6回あやせ環境展」に出演

神奈川県綾瀬市役所で開催された「第6回あやせ環境展～のこしたい青い地球と緑のあやせ～」に出演しました。本イベントは、市民生活・事業活動に密着する環境問題を取り上げ、環境保全のための活動や省エネルギー、新エネルギーに取り組む団体などを紹介し、地球環境保護の普及啓発を図ることを目的としたものです。本プロジェクトは外来生物問題やレジ袋の削減などをテーマに、環境劇「エコレンジャー」を披露しました。



12月4日 「第4回富士市環境フェア」に出演

本イベントは、富士市産業交流展示場「ふじさんめっせ」(静岡県)にて、富士市の主催により、環境問題に対する取組みや自主的な環境保全活動を推進する目的で開催されたものです。当プロジェクトは、環境劇「エコレンジャー」を2回披露。世界的な飢餓、石油の大量消費、外来種問題による環境への影響など、社会的な問題を背景に構成しており、大変好評だったため、次回も参加してもらいたいとの言葉をいただきました。



8月16日 「びっくり!エコ100選 2010」に参加

新宿タカシマヤで行われた環境イベントで、「エコレンジャーの環境教室」と題した劇を上演しました。当日は、小学校高学年の児童と保護者ら約30人が参加。学生たちはキャラクターに扮し、生活から排出される二酸化炭素が環境に与える影響や、二酸化炭素を減らす身近な例などを紹介しました。また牛乳パックで作ったしおりをプレゼント。観劇した児童らは、学生からの環境に関する質問に答えるなど、積極的に参加していました。



11月20日 「くすのき祭り」で環境劇「エコレンジャー」を披露

平塚市立旭小学校(神奈川県)で開催された文化祭「くすのき祭り」において、環境劇を披露しました。今回の出演は同小学校PTAの皆さまよりご依頼を受けたことで実現。会場には小学生児童約150名とその保護者、関係者らが数多く集まり、同劇では5人のエコレンジャーがそれぞれ「ポイ捨てをしない」「動物を大切に」「レジ袋をもらわない」「エコバッグを持ち歩く」「食べ物を残さない」という身近に出来るエコを訴えかけました。



12月26日・27日 「第8回全国大学生環境活動コンテスト(ecocon2010)」に参加

本企画は、環境に関する様々な分野で活躍中の社会人・学生・見学者による公開選考を通じ、学生の環境活動を多角的に評価・表彰する催しです。立正大学大崎キャンパス(東京都品川区)の会場には、全国から51団体が参加しました。本プロジェクトは環境劇「エコレンジャー」で、今年度の反省点や改善策をプレゼンテーション。本プロジェクトはグループ中3位となりました。



Music Art Project (MAP)

<～音と形を融合した総合芸術～>

湘南
キャンパス

2年に1度開催するオペラ公演の実現を目標に活動しています。2010年度の活動は、主にオペラ制作です。前回のオペラ公演「夜叉ヶ池(原作:泉鏡花)」では、脚本や作曲・演出まで全て学生の手で行いました。また、学内外で開催する演奏会などで、日ごろの成果を発表する機会も多くあります。音楽を通じて仲間と出会い、多くの経験を積み、より豊かなキャンパスライフを送るためのプロジェクトです。

プロジェクトリーダー 中島麻耶 教養学部 芸術学科音楽学課程 3年
サブリーダー 田端剛太郎 教養学部 芸術学科音楽学課程 4年 / 小野田紗季 教養学部 芸術学科音楽学課程 3年
広報リーダー 北澤彩香 教養学部 芸術学科音楽学課程 2年 / 会計責任者 松ヶ野優和子 教養学部 芸術学科音楽学課程 2年

参加人数 176人

12月22日 「X'mas Concert 2010」を開催

湘南キャンパス松前記念館講堂において、「X'mas Concert 2010」を開催しました。本イベントは、クリスマスシーズンを前に世界中で多くのコンサートが開催される中、一般の方にも身近にクラシック音楽を楽しんでもらいたいと企画したものです。今回はこれまでとは趣向を大きく変え、CMなどに使用されている親しみ深いクラシック音楽を取り上げ、音楽技術の高さと魅力を伝える「クラシックコンサート」と、クリスマスや12月にぴったりの楽曲をお届けする「クリスマスコンサート」の2部構成で開催しました。会場には地域の方々をはじめ約80名が訪れ、和やかな雰囲気の中演奏がスタート。出演した5人のメンバーは、楽曲に合わせたきらびやかなドレスに次々と衣装替えをしながら演奏を披露し、訪れた観客を魅了しました。



2011年 2月16日 オペラ「CAMELIA」を公演

結成5周年記念オペラを伊勢原市民文化会館大ホールで公演。今回はグリム童話「手なし娘」を原作にした洋風オペラに初挑戦しました。本作品は、脚本から作曲、演出、出演、チラシ制作やチケット販売に至るまで、すべてを学生メンバーが手がけ、総勢100名以上のスタッフ・キャストで一つの舞台を作り上げました。

当日は、魔力によって視力を奪われた娘・カミーリアと王子の波乱万丈のラブストーリーを、学生自身が作曲を手がけた40曲以上の音楽にのせて上演。華やかな衣装に身を包んで堂々と歌い、演技をする学生らの姿に、会場に集まった約560名の観客から大きな拍手が送られました。

「長い期間にわたって練習をしてきましたが、本番はたったの1回。でもその1回にメンバー全員の思いを込めることができました」「本番でハプニングは多少ありましたが、最後までやり遂げることができてうれしい」「約1年かけて練習を続けてきました。舞台の最後に近づくにつれて、いろいろな思いが込み上げてきました」とメンバーは感動を語っていました。



サイエンスコミュニケーター

<理科を楽しみ興味がわく>

湘南
キャンパス

私たちは、子供から大人まで、多くの人たちが自然科学に興味を持ち、楽しんでもらえる活動を行っています。幅広い自然科学分野で楽しい科学実験などの体験型学習や、面白い科学教材の開発などの教育支援を通じて、多くの子供たちに楽しく学んでもらいたいと思っています。

プロジェクトリーダー 梶田 聡史 理学部 物理学科 2年
サブリーダー 永倉 匡 理学部 物理学科 2年
山田 実俊 理学部 数学科 2年
広報リーダー 榎本 充 工学部 精密工学科 1年
会計責任者 澁田 優希 理学部 物理学科 1年
参加人数 52人

7月18日 「水」をテーマにした科学教室を開催

海老名市青少年会館(神奈川県)において、小学生8名と保護者4名の方を対象に開催。私たちに最も身近な「水」について、その性質、種類による味の違い、人体との関係に焦点を当て、実験と実習をとおして学びを深めました。参加した小学生、保護者の皆さんから「実験が面白かった」「家でもやってみよう」「また科学教室に参加したい」「子どもだけではなく、自分たちの勉強にもなった」との感想をいただきました。



8月6日 「大学体験授業」を実施

本学付属の中高生59人を対象に、身近な数学や科学に触れてもらい、理科教育への関心を高めることを目的として、大学体験授業を湘南キャンパスで実施。授業ではこれまで小学生を対象に実施してきた「身体と水の関係」の講義と、メビウスの帯と黄金比を利用した工作を実施。メンバーは今後も講義の内容を充実させ、中高生の皆さんにとってより有意義な授業ができるよう、工夫していきたいと感想を語っていました。



8月14日～16日 「第21回 星の学校」で講演

海老名市中央公民館(神奈川県)で行われた「第21回 星の学校」において講演などを行いました。本イベントは海老名天文同好会の主催により、小・中学生を対象に天文に関する講義を開催したものです。14日には「東海大学チャレンジセンターの活動」と題して、参加した小学生16人と中学生10人を対象に授業を行い、15日からは本プロジェクトメンバーの岸茜さん(物理学科4年)が講師を担当し、「星のつどい」と題して授業を実施しました。



9月11日 科学教室「科学の世界へようこそ ～子どもの夢と未来を切り拓こう～」を実施

山形県鶴岡市立朝暁第三小学校の5、6年生とその保護者を対象に、「なぜだろう」、「こうするとどうなるだろう」という疑問や気づきが、科学やものづくりの原点になっているという朝暁第三小学校の考えに基づき、子どもたちが課題や困難に挑んでいく力を身につける一助となることを目的としました。会場には児童とその保護者約480名が集まる中、最先端の「真空技術」をテーマに、講義、実験、クイズなど、楽しく学習をすすめました。



11月13日 「聴いて・食べて楽しむ 実験教室」を実施

特定非営利活動法人かでの湘南児童デイサービス虹(神奈川県秦野市)で、小学生の障がい児童とその保護者、近隣の住民の方を対象に実験教室を実施しました。本イベントでは、長さの違う真ちゅうのパイプを落として音色を奏でる「バンジーチャイム」と、電気パン作りの実験を行いました。参加した保護者の方からは、「参加してみてよかったです。子どもだけではなく、自分自身も楽しめました」といったお言葉をいただきました。



病院ボランティアプロジェクト

湘南
キャンパス

<1つでも多くの笑顔を提供するために私たちが出来ること>

本学医学部付属病院に赴き、小児科や整形外科などで患者さんと触れ合い、病棟活動を行っています。その経験を通して得たことをもとに、さらにより良い活動のためのスキルアップを目的としたセミナーや、入院している患者さんへの「癒し」の場の提供を目的としたイベントも開催。今後、他病院での新企画も充実させていく予定。各企画を通して病院と地域を結びつけるように働きかけることが我々のプロジェクトです。

プロジェクトリーダー 山田裕樹 文学部 心理・社会学科 2年
サブリーダー 小松美穂 文学部 心理・社会学科 2年
広報リーダー 花光 萌 文学部 北欧学科 4年 / 会計責任者 早川祐貴 工学部 動力機械工学科 4年

参加人数 32人

7月2日

第5回セミナー
「死ぬときに後悔すること25から学ぶ
緩和ケアと終末期医療」を開催

20万部を超えるベストセラー『死ぬときに後悔すること25』の著者である緩和医療医 大津秀一氏をお迎えして、講演いただきました。緩和ケアと終末期医療での実際の事例を交えながら、人生の最期を前に、どのようなことに後悔するのか、具体的に説明。学生や教職員、地域の方々など約90名が参加して、講演に耳を傾けました。



8月5日

第6回癒しのイベント
「海風奏でる夏のハーモニー
～浜辺からの贈り物～」を開催

本学医学部付属病院東海ホールにおいて、患者さんとそのご家族を対象に開催。夏らしく「海」をイメージした装飾を施し、集まった約80名の観覧者の皆さんにはパンフレットと共にメンバーお手製のうちわと歌詞カードを配布。本学文化部連合会グリークラブの協力のもと、様々なジャンルの歌を披露しました。



9月9日

「おしゃべり映画会」を開催

国立病院機構神奈川病院(神奈川県秦野市)にて、入院中の高齢者の患者さんを対象に開催。イベントにあたり、高齢者の方との接し方などの勉強会を実施。上映作品は、猫と人との交流を描いた「にゃんこ THE MOVIE」。会場には70歳～80歳の患者さん約10名が参加し、映画とともに、メンバーとの会話を楽しみました。



10月21日

付属病院でミニ運動会を実施

入院中の児童、生徒へのサポートとして授業の補完が行われている東海学級の小中学生とその保護者を対象に、ミニ運動会を開催。当日は児童、生徒8名とその保護者10名ほか約40名がイベントに参加し、サッカーのワールドカップをテーマにしたゲーム4種目を行い、会場は大いに盛り上がりました。



12月14日

第6回セミナー
「快眠セラピー～いつもの眠りから、
明日の快眠へ～」を開催

人生の時間のうちで1/3を占める「睡眠」をテーマに、眠りを理解し改善するための「快眠セラピー」を、快眠セラピストの三橋美穂先生をお迎えしてご講演いただきました。当日は約40名の方が参加。講演の最後には三橋氏が開発した快眠に導く音楽を聴きながら、「快眠メディテーション」も行われました。



12月18日

第7回癒しのイベント
「楽しこの夜～あなたに届け、
ハッピーソング～」を開催

本学医学部付属病院東海ホールにおいて、約120名の方が参加。当プロジェクトが用意したパンフレットや手作りのクリスマスカードが配られました。今回のイベントは平塚市を中心に活躍しているゴスペルクワイヤ ワンキューブさんの協力のもと、学生もサンタクロースに扮して登場、患者さんと一緒に歌いました。



スポーツ社会貢献プロジェクト

湘南
キャンパス

<スポーツ社会貢献とは何か>

東海大学体育会の協力のもと、近隣小学生を対象としたスポーツ教室や、平塚市の児童館にてニュースポーツの特別授業を行いました。スポーツを通して、イベントに携わるすべての人々が笑顔になれるようなイベントの企画・運営をしています。

プロジェクトリーダー 通藤洋祐 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科 3年
サブリーダー 佐藤裕美 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科 3年
広報リーダー 井川有華 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科 3年
会計責任者 矢部真純 体育学部 生涯スポーツ学科 2年

参加人数
57人

5月5日

秦野市「子どもまつり」でスポーツイベントを開催

秦野市中央運動公園陸上競技場と、みずなし川緑地で開催された秦野市主催の「子どもまつり」において、ニュースポーツを体験するイベントを実施しました。本プロジェクトはチームプレーで互いに協力することを学ぶほか、本学学生との交流を深めることを目的として、インディアカ、キャッチザスティック、缶ジャイロといったニュースポーツイベントを実施しました。

イベントには約1,000人が来場し、そのうち約200人のご家族がブースを訪れ、保護者の皆さんも子どもたちと一緒にニュースポーツを楽しみました。参加いただいた方々の中には何回もプレイする姿も見られ、「来年もぜひやってほしい」「大人も一緒にできるニュースポーツも企画してほしい」といったご意見をいただきました。

5月8日

「東海ノルディックウォーキング」を開催

「東海大学と地域をつなぐ」をテーマに、田村秀人氏、藤本豊久氏、木崎秀臣氏、3名の講師をお迎えし、日本では比較的新しいスポーツであるノルディックウォーキングについてのセミナーを行ったほか、湘南キャンパスとその周辺約5キロのコースを実際に周遊しました。当日は本学学生と湘南キャンパス周辺にお住まいの方など、19名が参加。天気にも恵まれ、新緑が美しいキャンパスでの実施となりました。



7月11日

「第2回ゼロから始めるスポーツ体験教室」を開催

湘南キャンパス総合体育館において、普段接する機会の少ない競技を地域の子もたちと一緒にプレーすることによって、交流を深め、多様なスポーツ競技を普及することを目的として開催。当日はあいにくの雨天となってしまったため、フィールドホッケーを除く、ハンドボールとチアリーディングの2教室を開催しました。参加した45名の子どもたちは、本学学生の指導のもと熱心な様子でそれぞれの競技に取り組み、楽しんだ様子でした。



11月20日

伊勢原市のイベント「サポセンフェスタ」で特別教室を実施

いせはら市民活動サポートセンターで開催されたイベントでスポーツ特別教室を実施。当プロジェクトは同市内の小・中学生を対象に、「ペットボトルラクロス」など、簡単なゲームを開催。参加した17名の児童・生徒と一緒に、スポーツを楽しみました。参加した子どもたちを対象に行ったアンケート結果では、全員が「満足した」と回答。「来年もイベントを実施してほしい」という要望を、保護者や主催者からもいただくことができました。



2011年
1月8日

「第3回東海スポーツ教室DAY」を開催

湘南キャンパスにおいて、子どもたちにスポーツの素晴らしさや楽しさを伝えると共に、個人個人の能力を引き出し、可能性を広げてもらうことを目的として開催。小学生から中学生までの児童・生徒868名とその保護者を対象に、個々の目標に合わせて、大学トップレベルの本学男子バスケットボール部、硬式野球部、硬式テニス部、女子バレーボール部、水泳部、陸上部短距離ブロック、男子柔道部、男子サッカー一部による指導を行いました。



先端技術コミュニティ「ACOT」

熊本
キャンパス

＜最先端技術を身につけ、実用化する＞

ACOTとは、Advanced Community Of Technologyの略で、WEB制作、windowsプログラミング、デザイン、ロボットプログラミング、センサーデバイスなどを用い、先端技術を自ら習得するとともに、大学、短大、高校との連携を図り、コミュニティを構築しながら技術の実用化を行っています。

プロジェクトリーダー 千葉 仁 産業工学部 電子知能システム工学科 4年
 サブリーダー 花田 和也 産業工学部 電子知能システム工学科 3年
 田中 寿幸 産業工学部 電子知能システム工学科 4年
 広報リーダー 中村 文彦 産業工学部 電子知能システム工学科 4年
 会計責任者 藤垣 昂士 産業工学部 電子知能システム工学科 2年
 参加人数 34人

4月21日～ 付属第二高等学校で技術講習を実施

ワールド・ロボット・オリンピアード(WRO)に出場を予定している本学付属第二高等学校の生徒約20人を対象に、ロボット教材「教育用レゴ マインドストームNXT」を用いた技術講習を行いました。本プロジェクトメンバーは、NXTの光センサー、超音波センサー機能などの説明のほか、デモや操作練習を実施。参加した高校生は、WRO全国大会を目指したいと講習終了後も引き続き大学を訪れ指導を受けるなど、意欲的に学んでいました。



6月11日 「ロボットを作って動かそう!」を実施

熊本市立西原小学校の児童800名を対象に、科学技術と工学を楽しく、体験的に学習する機会を子どもたちに提供し、理科離れ改善の一助となることを目的として実施されました。本プロジェクトメンバーがロボット教材の解説を行った後、児童たちがロボットを製作し、コントローラーを使って操作。初めてのロボット教材に興味津々の様子で、実際に制御する際には周りを囲むように集まるなど、大変盛り上がっていました。



6月20日 オープンキャンパスで「ロボット講習」を実施

熊本キャンパスで行われたオープンキャンパスで、自律型ロボット教材「教育用レゴ マインドストームNXT」を用いたロボット講習を実施しました。本講座では、本プロジェクトが出場を予定しているETロボコンで使用するロボットを用いたデモ走行と解説を行い、体験会も合わせて開催。また、参加した高校生が少しでも大学生活について理解が深められるよう、本学チャレンジセンターの取り組みや大学での講義の様子なども紹介しました。



8月5日 技術支援付属高校が「WRO Japan2010 九州・山口地区大会」に出場

技術支援を行ってきた本学付属第二高等学校と付属第五高等学校が、福岡で開催されたWRO地区大会に出場しました。WROは世界中の子どもたちがロボットの製作・自動制御技術を競うコンテストで、地区大会には21校の高校生チームが参加。第二高等学校は4位の好成績で、審査員特別賞を受賞。第五高等学校は走行中のトラブルで入賞できませんでしたが、熱意ある取り組みを評価したいと本プロジェクトメンバーは感想を述べていました。



9月4日～5日 「ETソフトウェアデザインロボットコンテスト2010 九州地区大会」に出場

組込みシステム開発の教育機会を提供することを目的として、大会までに技術研修会や試走会が行われるなど、段階的に学びを深められるように運営されている「ETロボコン」。今大会には6名が参加しましたが、調整不足からくるプログラムミスで、無念のリタイア。出場団体全46チームのうち、競技部門で12位、モデル部門においてB-の評価でした。2日目には来年度に向けての勉強会が行われ、参加メンバーは気持ちを新たにしていました。



三保活性化プロジェクト

清水
キャンパス

＜地域との交流を通して、三保活性化に貢献する＞

「東海大学海洋学部の拠点である三保を活性化させよう。」というテーマの下で、「科学」・「音楽」・「美術」という自分たちの得意な分野で活動しています。さらに私たちが活動する事によって海洋学部の他団体と協力し、地域との交流という体験を通して三保地区を発展させていきたいと思っています。

プロジェクトリーダー 加藤忠義 海洋学部 海洋資源学科 3年
 サブリーダー 遠藤帆波 海洋学部 海洋生物学科 3年
 佐久間勇気 海洋学部 海洋文明学科 2年
 広報リーダー 増田康祐 海洋学部 海洋資源学科 3年
 会計責任者 日置伸幸 海洋学部 海洋資源学科 2年
 参加人数 45人

12月5日 「第42回 東海大学バンドフェスティバル」に出演

本イベントは静岡県にある当学園の幼稚園から大学までの音楽団体が毎年行っているもので、今回はテーマを「煌めき～きらめき～」として5つの団体が出演し、地元から約700名が来場しました。本プロジェクトは本学海洋学部・開発工学部・短期大学部で構成する「静岡吹奏楽団」のメンバー・合唱スタッフとして参加しました。演奏、合唱とも大変好評で「一緒に歌うことが出来るとても楽しかった。」などの感想をいただきました。



12月12日～26日 「キッズランド」を開催

「芸術(ものづくり)」「科学」「音楽」の体験を通して、その楽しさと奥深さを知ってもらうことを目的として、地域の小学生を対象に、岡生生涯学習交流館(静岡市清水区桜が丘)、三保生涯学習交流館(静岡市清水区三保)にて実施しました。「芸術」チームでは2011年オリジナルカレンダーを、「科学」チームは人エイクラを使った万華鏡を、「音楽」チームは空き缶でマラカスを制作。両日あわせて約90名の児童の皆さんにご参加いただきました。



阿蘇援農コミュニティプロジェクト

阿蘇
キャンパス

＜農家の現状＞

地域農業の現状、実態を学ぶため、キャンパス周辺の農家を訪ね農作業などを通じて、農村・農家の知恵や技術を習得しながら、農家の高齢化・食糧自給率の低下・耕作放棄地の増加などの大きな社会問題に積極的にアタックしています。

プロジェクトリーダー 古賀 郁 農学部 応用動物科学科 3年
 サブリーダー 齋竹 孝昌 農学部 応用植物科学科 3年
 岩原 真利 農学部 応用動物科学科 3年
 広報リーダー 竹田 直樹 農学部 応用植物科学科 3年
 会計責任者 井下知也 農学部 バイオサイエンス学科 3年
 参加人数 31人

援農活動を実施

今年で3年目となるこの取り組みは、農作業のお手伝いをしながら現状を学び、阿蘇キャンパス周辺の地域農業の活性化を目指すものです。記録的な猛暑となった夏は、南阿蘇村にて、昨年度の2倍となる11人のプロジェクトメンバーが7つの農家でトマト・アスパラガスなどの収穫、除草、定植などの作業を実施。冬は、熊本県青年農業クラブからの要請を受け、トマト農家と樹木の苗木農家での活動を行いました。農家の皆さんから様々な感謝の言葉をいただいたほか、受け入れ農家以外からも、援農をお願いできないかという要望が数多く寄せられました。



夏 8月2日～8日 (熊本県産山村)
 23日～29日 (阿蘇市南阿蘇村)
 冬 9月11日～17日 (阿蘇市)
 12月24日～29日 (阿蘇市南阿蘇村)
 2011年 春 2月8日～16日 (阿蘇市)
 3月20日～26日 (阿蘇市南阿蘇村)
 3月25日～31日 (阿蘇市南阿蘇村)



福祉除雪プロジェクト

＜地域貢献の拡大・活動内容の充実・時期の長期化＞

70歳以上の方および、重度の身体障害のある方だけで構成されている世帯などを対象に、玄関周りの除雪・屋根の雪降ろしを実施。さらに「人のためになる」をキーワードに、既存の除雪の枠を超え、高齢者からの依頼によって、引越・ゴミの搬出・草刈りなど、幅広くボランティア活動を行っています。また、北海道との連携により、大学生ボランティアサミットネットワークを設立。代表幹事校としての活動も推進しています。

プロジェクトリーダー 池田 翔 国際文化学部 国際コミュニケーション学科 4年
 サブリーダー 上田貴大 生物理工学部 海洋生物科学科 4年 / 林信太郎 国際文化学部 地域創造学科 4年
 広報リーダー 佐藤亮佑 国際文化学部 国際コミュニケーション学科 4年 / 会計責任者 吉田愛美 国際文化学部 国際コミュニケーション学科 4年

札幌
キャンパス

参加人数 76人

7月1日

北海道知事との座談会に出席

本プロジェクトリーダーの池田 翔さんが、北海道庁で開かれた「大学生ボランティアとの座談会」に出席し、高橋はるみ北海道知事に会見。札幌市内及び近郊の9大学から代表者が集まり、活動の紹介や「ボランティア活動を通じて得たこと、考えたこと」をテーマにした意見交換がなされました。



11月24日

「安全・安心まちづくりシンポジウム
～高齢者が安全で安心に暮らせる社会を目指して～」に参加

北海道警察からの要請を受けた北海道警察犯罪脆弱者対策研究委員会が、高齢者による万引き犯罪が増加している現状に焦点を当て、高齢者の孤立防止に社会全体で取り組むきっかけとすることを目的に開催したもので、6団体と市民ら約200名が参加。パネルディスカッションの中で、活動内容を報告しました。



12月14日

札幌キャンパスで今年度の出陣式を実施

今年は独居老人宅での畑おこしや病気の方の引っ越し手伝いなどにも力を注いだことを報告。西村弘行副学長からは「活動を通じて、お年寄りや地域の方々と対話することでコミュニケーション能力などの社会人基礎力が自然と身につきます。今シーズンも頑張ってください」と激励を受けました。



12月15日

札幌市の防犯活動に参加

北海道警察などの要請を受け、学生35名が札幌市中央区で行われた防犯パトロールに参加。年末の防犯を訴えるパンフレットや防犯グッズを配布の後、「歳末クリーン薄野特別運動出発式及びパレード」に参加し、殿川一郎道警本部長や高橋はるみ北海道知事ら関係者約200名らとともに、札幌駅前通りを練り歩きました。



2011年 1月15日

「ヤングボランティアサミット」に参加

国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催。警察と連携してボランティア活動を行っている大学生約200名が会し、情報交換を行い今後の活動に生かそうという試みで、本プロジェクトは北海道代表として参加。終了後に行われた全体会では、積極的に活動を展開している団体として本プロジェクトの活動を紹介しました。



2011年 2月10日

本格的に除雪活動を開始

今年度は60軒の登録があり、メンバーたちは昨秋から各戸を訪問して戸主と面談、除雪が必要な場所についてカルテを作成して冬に備えてきました。12月から始まった冬の除雪では、2月6日までに21回出動。住民の方からは「家の前に雪が降り積もると、どうしたらよいかと不安になることもあったが、皆さんのおかげで安心して暮らせます」といった声をいただきました。



チャレンジプロジェクト学科別参加人数

学 部	学 科	人数
国際文化学部	地域創造学科	19
	国際コミュニケーション学科	26
生物理工学部	生物工学科	2
	海洋生物科学科	3
	生体機能科学科	2
	通信ネットワーク工学科	1
情報通信学部 文学部	文明学科	3
	アジア文明学科	3
	ヨーロッパ文明学科	6
	アメリカ文明学科	2
	北欧学科	5
	歴史学科 日本史専攻	2
	歴史学科 東洋史専攻	2
	歴史学科 西洋史専攻	6
	歴史学科 考古学専攻	2
	日本文学科	1
	英語文化コミュニケーション学科	3
	広報メディア学科	9
	心理・社会学科	18
観光学部	観光学科	6
政治経済学部	政治学科	6
	経済学科	10
	経営学科	3
法学部	法律学科	17
教養学部	人間環境学科 自然環境課程	28
	人間環境学科 社会環境課程	1
	芸術学科 音楽学課程	106
	芸術学科 デザイン学課程	2
	国際学科	10
理学部	数学科	26
	情報数理科	5
	物理学科	23
	化学科	1
情報理工学部	情報科学科	2
	コンピューター応用工学科	2

学 部	学 科	人数	
情報理工学部	情報メディア学科	1	
	ソフトウェア開発工学科	1	
工学部	情報通信電子工学科	1	
	生命化学科	6	
	応用化学科	3	
	光・画像工学科	1	
	原子力工学科	3	
	電気電子工学科	24	
	材料科学科	7	
	建築学科	54	
	土木工学科	1	
	精密工学科	7	
体育学部	機械工学科	20	
	動力機械工学科	81	
	航空宇宙学科 航空宇宙学専攻	84	
	エネルギー工学科	1	
	体育学科	2	
	競技スポーツ学科	3	
	生涯スポーツ学科	11	
	スポーツ・レジャーマネジメント学科	48	
	医学部	医学科	1
	健康科学部	社会福祉学科	3
総合経営学部	マネジメント学科	3	
産業工学部	環境保全部	1	
	電子知能システム工学科	29	
農学部	応用植物科学科	12	
	応用動物科学科	6	
	バイオサイエンス学科	6	
工学研究科	情報理工学専攻	1	
	応用理学専攻	1	
	機械工学専攻	1	
	航空宇宙学専攻	6	
	電気電子システム工学専攻	2	
	情報工学専攻	2	
産業工学研究科	情報工学専攻	2	
芸術学研究科	音響芸術専攻	9	
合 計		805	

2010年5月時点

ユニークプロジェクト

■湘南キャンパス

障害者自立支援プロジェクト
Green Communications
SEE Project
コンクリートカヌープロジェクト
Beijo Me Liga (ベイジョ・メ・リーガ)
きらきら実験教室
ヒューマノイド研究チームプロジェクト
Same Same But TOKAI
リトル・クリエイターズ・プロジェクト
RCハンドランチ
Tokai International Communication Club

TOKAI DESIGN PROJECT
バリアフリー推進プロジェクト
宇宙エレベーターレースチャレンジ

■旭川キャンパス

アイスパントオンプロジェクト2011
木工製作でおこなう社会貢献プロジェクト

■札幌キャンパス

地域連携研究プロジェクト

■代々木キャンパス

木楽な「あがの宿」保存・再生プロジェクト

■高輪キャンパス

takanawa共育プロジェクト
ロボコン道場

■沼津キャンパス

Make Up Happy プロジェクト (MUHP)

■熊本キャンパス

肥後のたまもの
LINK THE LOCAL
River Action

■阿蘇キャンパス

あにまるれすきゅープロジェクト

11月1日～4日

東海大学建学祭 各プロジェクト企画一覧

環境キャラバン隊
天ぷら油で走るバスの展示と説明

サイエンスコミュニケーター
スペースワールド
宇宙をテーマにした展示・工作・
トークコーナー

キャンパスストリートプロジェクト
ビーチハウスの一部再建、
パネル・模型展示
ThLive!展示

スポーツ社会貢献プロジェクト
パネル展示・パンフレット配布

病院ボランティアプロジェクト
病院ボランティア活動紹介

Tokai Formula Club
大会参戦車両の展示
走行中の映像の上映

Music Art Project
MAPコンサート2010

ライトパワープロジェクト
次世代の乗り物の展示
ホームカミングデー展示

東海大学学生ロケットプロジェクト
TSRP屋内展示
モデルロケット教室
ロケットエンジン燃焼実験

先端技術コミュニティ「ACOT」
プログラミングコンテスト
ロボット等の展示とデモンストレーション

三保活性化プロジェクト
(清水キャンパス)
各チームの活動報告

阿蘇援農コミュニティープロジェクト
(阿蘇キャンパス)
援農活動の作業風景の展示、上映

6月19日～20日
福祉除雪プロジェクト
(札幌キャンパス)
パネル展示による活動紹介

チャレンジセンター科目

チャレンジセンターは、集い力・挑み力・成し遂げ力を身につけることによって建学の精神を培うという教育理念のもとで、総合大学としての多様性を活かし、学部・学科単独では出来ない、社会とのつながりの中での実践的な教育を行ってきました。2010年度のカリキュラム改訂では、(1)学生および教職員にとってより分かりやすい科目名・構成にする、(2)教育活動のもう一つの柱であるプロジェクト活動支援との連動を具体化する、という方針に沿った改訂を行ない、まず、「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」に関する科目を副専攻「社会的実践力」としてパッケージ化するとともに、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲという番号を(入門)(演習)という名称に変えることで、科目の目的・体系性を明確にしました。

また、プロジェクト活動支援との連動を具体化する科目として、各プロジェクト活動を実施する上で必要かつ有益と考えられる専門的知識・技術を体系的に教授する科目「プロジェクト実践」を新たに開講し、プロジェクト活動の教育成果をより高いものにすることを目指しました。

さらに、より充実したジャーナリズム実践教育を目指して、これまでの「ジャーナリズム実践教育コース」を拡大し、「ジャーナリズム実践教育副専攻」及び「ジャーナリズム実践教育特定プログラム」を開設しました。

【2009年度学部等研究教育補助金の報告】

2009年度は、本センターにおいて以下の2件の研究計画が学部等研究教育補助金※の対象となった。

計画名:プロジェクト実践のための教材開発について

計画代表教員:岡田 工

2010年度「プロジェクト実践」をはじめ「プロジェクト入門Ⅰ」「集い力Ⅰ」での活動をビデオカメラで記録・編集し、その映像を授業の振り返りや出席できない学生に対し有効なコンテンツとして活用した。また、チャレンジプロジェクトのサイエンスコミュニケーターの勉強会資料としても提供した。さらに本計画の成果は、社団法人 私立大学情報教育協会が主催する平成22年度「教育改革ICT戦略大会」において報告した。

計画名:レゴ教材を使ったグループ演習で学ぶチームマネジメントの教授方法開発及びその理論化のための図書購入および研修会参加

計画代表教員:尾崎 由佳

「システム思考入門」研修(㈱チェンジエージェント主催)に参加し、複雑な問題構造を見抜く力を養成する方法論について考察した。その成果として、2010年度「成し遂げ力Ⅱ」においてシステム思考トレーニングを取り入れ、プロジェクトシミュレーション実習で問題構造を見抜く際の方法論として紹介し、問題解決の前に、問題構造を見抜くことの大切さを学生に認識させる点に成果をあげている。

※学部等研究教育補助金は、学部等の研究教育を活性化させることを目的として、学部長・所長に配算されるものです。

【履修者状況一覧】

授業科目名	担当教員名	開講クラス数	履修者人数
集い力Ⅰ(入門)	園田 由紀子・尾崎 由佳	12	599
集い力Ⅱ(演習A)	園田 由紀子・田中 彰吾	6	91
集い力Ⅲ(演習B)	崔 一英・岡田 工	10	78
挑み力Ⅰ(入門)	園田 由紀子	10	384
挑み力Ⅱ(演習A)	堀本 麻由子	4	103
挑み力Ⅲ(演習B)	園田 由紀子・大熊 亨	10	142
成し遂げ力Ⅰ(入門)	尾崎 由佳	8	552
成し遂げ力Ⅱ(演習A)	堀本 麻由子	4	68
成し遂げ力Ⅲ(演習B)	尾崎 由佳	8	116
プロジェクト入門Ⅰ(A)	岡田 工・岩田 祐子・広川 美津雄	14	99
プロジェクト入門Ⅱ(B)	崔 一英・堀本 麻由子	10	37
プロジェクト入門C	園田 由紀子	2	6
プロジェクト実践A	岡田 工	2	2
プロジェクト実践B	岡田 工・森山 美紀子 他	2	1
プロジェクト実践C	尾崎 由佳	1	1
合 計		51	2249

〈ジャーナリズム実践教育コース〉

授業科目名	担当教員名	開講クラス数	履修者人数
時事英語演習Ⅰ	山口 勉	1	18
ジャーナリズム史	飯塚 浩一	1	13
ジャーナリズム入門Ⅰ	山口 勉・岩田 伊津樹	3	71
ジャーナリズム演習Ⅰ	山口 勉・岩田 伊津樹	2	26
国際ジャーナリズムⅠ(A)	山口 勉	1	131
ウェブ・ジャーナリズム	岡本 勉	1	44
経済ジャーナリズム	丸山 康之	1	163
政治ジャーナリズム	鬼頭 誠	1	89
出版ジャーナリズム	堀間 善憲	1	45
フォト・ジャーナリズム	平 博之	1	19
環境ジャーナリズム	岩田 伊津樹	2	177
国際ジャーナリズムⅡ(B)	山口 勉	1	51
ジャーナリズム入門Ⅱ	山口 勉・岩田 伊津樹	2	9
ジャーナリズム演習Ⅱ	山口 勉	1	46
メディア概論	水島 久光	1	21
時事英語演習Ⅱ	山口 勉・岩田 伊津樹	2	67
スポーツ・ジャーナリズム	山岸 均 他	1	220
マスコミ法制(マスコミ倫理)	岩田 伊津樹	1	79
ジャーナリズム・ゼミナール	山口 勉・岩田 伊津樹	4	19
科学ジャーナリズム	笹沢 教一	1	70
文化ジャーナリズム	西田 浩	1	66
医療・福祉ジャーナリズム	田中 秀一	1	30
合 計		31	1474

集い力入門

授業概要

本授業では、「他者の存在を認める」ことに重きを置きつつ、他者と集う為に必要なコミュニケーション力の基礎を学習する。

最初に、コミュニケーションとは何かを「記号」という視点から考え、コミュニケーションが言葉だけではなく、あらゆるもので関係が作られていることを知る。さらに、人間が最も活用する言葉、文化、集団での役割、立場といったコミュニケーションに影響を与える要素を関連付けながら学ぶ。講義で、理論や構造について理解し、演習でそれらの学びを実感し、より実践的な力として身につけられるよう、「振り返り」という自分の言葉で考え、書くことを、繰り返し行う。

さらに、実践コミュニケーション演習では、シミュレーション型や対戦ゲーム型の演習を使い、様々なコミュニケーション場面を体験し、関係開始、合意形成、役割獲得などを体験的に楽しみながら学習している。

学習の到達目標

学生には、この授業で目指すいくつかの項目を、教育目標として、具体的に提示し、授業内での目標設定や学習意欲の喚起に用いている。

【コミュニケーション】 相手の気持ち・立場・役割に配慮しながら、ノンバーバルなスキルも使ってコミュニケーションできる

【関係開始スキル】 初対面の人に積極的に自己を開示、関係を開始するだけでなく、他者にも開示を促せる

【合意形成】 異なる意見を調整し、メンバーが納得できる意見にまとめていくことができる

【自己開示】 相手の気持ちに配慮しながら、自分の考え・感情を素直に伝えることができる

【集い力理解】 集い力を正しく理解し、その意味と授業での成長や成果、今後の能力向上の方法を具体的に説明できる

〈具体的演習内容〉

ロールプレイを中心に、設定された役柄を使いながら、初対面の他者と関係を築き、妥協や押しつけではない合意を目指すコミュニケーションを体験的に学ぶ。設定を与えるのは、他者に対する抵抗を軽減するだけでなく、新たな一面に気付きやすくする為である。典型的なものがゲーミング・シミュレーション型演習の「密室事件解決演習」である。この演習は、事件の新聞、現場写真、事件関係者の情報などをもとに、この事件を担当する記者だったら自らの推理を考える。異なる意見のメンバーでグループを構成し、希望した学生等に関係者の役を演じてもらう。記者チームの学生が関係者役の学生に、取材し、様々な情報を組み合わせながら、一つの真相にまとめ、記事を作るというものである。取材の際は、関係者は、質問者の態度に合わせ素直に対応させ、相手の心情への配慮や礼儀の有無の影響や異なる意見や立場から一つの合意を導く過程を学ぶ。

〈学生の反応・感想〉

授業の終わりの振り返りでは、「意見が違う人にも、自分の意見や考えを伝え、理解してもらいことができるようになった。」や「何度も初対面の人と話さなければならぬ機会があり、最初は嫌だったけど、演習を繰り返すうち、初対面の人と話すことが嫌でなくなった。」「今までは、初対面の人により印象を与えたくて、控えめにしていたけど、密室トリックの演習で、全く知らない人、しかも同学年の人だけでなく先輩とも話す機会が多く、人見知りだった自分がうそのように、誰とでも話せるようになりました。」「密室トリック演習では、主体的に行動することの大切さに気がきました。誰かがやってくれる、自分は何もなくてもいいやと行動しないでのいるよりも、私がやりますと、一歩前に出た方が、コミュニケーションもとりやすくなるとわかりました。そのことに気付いて以来、なかなか決まらなかった就職も内定をとることができ、自分で行動することができるようになりました」など、様々な成長を実感することができたと書かれていた。

集い力演習A

授業概要

心理テストや簡単なワークを使って、自己分析やコミュニケーションスキルを学び、他者の関わり方の基本を確認する。その上で、自己開示や高度な表現を伴うグループ演習を行い、より高い実践力を獲得する。

誰でも初対面の人との作業には、多少なりとも抵抗をもつものであるが、目的を共有し、役割を意識し、相手に意見を伝え、他者の意見に耳を傾け、協働することで、集団での一体感や一人では味わえない達成感をもたらす。この抵抗を克服しながら、目標を達成するための集団を形成する方法を、体験的に学ぶ授業である。

学習の到達目標

【協働力・協調性】 メンバーのモチベーションやチーム意識を高めるように、他のメンバーに働きかけることができる

【ファシリテータースキル】 ファシリテーターとしてすべきことを理解し、グループの状況にあわせ、的確に行動できる

【傾聴・聴く力】 傾聴の具体的な技法、知識を持ち、それらの技法を使って、関係を深められる

【アサーション、自己主張】 アサーションの意味を正しく理解し、状況にあわせ、アサーティブな行動をとることができる

【集い力理解】 集い力の意味や授業での成長や成果、今後の能力向上の方法を具体的に説明できる

〈具体的演習内容〉

設定された役柄ではなく、自分自身を開示しながら、他者と協同する演習を行い、その中で、アサーティブや傾聴を使って、集団をまとめることができたか、自発的に手段に関わることができたかを学んでもらった。具体的には、自分自身を振り返り、今考えていること、将来の夢などをランダムに作ったグループで交換し合い、そこから一つの創作ストーリーを作ったり、与えられたお話を、即興で劇にする演習を行った。即興劇の演習では、ストーリーにおける自分の役割を理解し、自分らしく、そして自発的に行動することとチームワークの意味を理解した。

〈学生の反応・感想〉

授業の振り返りでは、「この授業を受ける前は、リーダーシップを持っているだけで、チームはうまく機能すると思っていたので、チームを引っ張って行くことが一番だと思っていましたが、他人の伝えたいことを聞き、共有することが、必要であることに気づき、実践することができました。」といったものや「第1回目のときの振り返りには「私は個人行動のほうが好きです」「集い力を身につけたいです」と、書かれていた。そして約3ヶ月後の第13回目の振り返りには「チームワークがまた深くなったような気がしました」「私が今日意識したことは、恥ずかしがらずにやることです」などと、集い力を無意識のうちに身につけていて、授業に意欲的になっていました。」「たったの3カ月でしたが、自分が本当に変わったと感じます。3カ月前の私は、大勢でいると疲れるし、団体に行動していても勝手に単独行動をするぐらい「集い力ゼロ」でした。しかし、この授業をとっていただけで、学園祭でも、みんなをまとめる役割をひきうけてみようと思えたと、こなせたと感じました。」「あなたとしゃべっていると、ポジティブな気持ちになれるし、話したあと、気分がよくなる」と。3カ月前の、話の途中によそ見していたりする私だったら、こんな嬉しいコトバをもらえなかったらどうなと感じました。この授業をとってよかったです。」など、実践的な能力の向上を実感することができた学生もいた。

挑み力II (演習A)

1. 授業のねらいとスケジュール

本授業では、グループでの協働の学びあいの中で、課題設定力、行動計画策定力を習得することをねらいとしている。難しい課題に挑むとき、課題をいかに設定するかが重要であり、個人は課題設定力を、チームやグループ活動による協働活動プロセスの中で培っていく。企業でも地域でも仕事やプロジェクトを実践するのは必ずグループであり、チームといえる。人と人が協力しながら持続的な行動や活動を行っていくことが求められている。グループが協働で目標を設定し、挑んでいくために必要な話し合いの仕方、チームワークを生み出す活動プロセス、持続的なグループ活動から組織的に発展していく過程について、協働学習理論、アクションラーニング理論をとりにれた講義とグループ演習を組み合わせることで体験的に学習できるようにしている。そして、授業を通して、「挑み力」とは何なのかについて検討し、今後の学生、社会生活の中で役立つことを目指す。グループ同士が交流することで、個別のグループ活動からグループが組織的に発展していく過程についても実践的に学習する。具体的な、授業スケジュールとしては、第一回～第三回ではグループ学習理論の理解、質問すること、聴くことを主体としたコミュニケーション力について学習する。第四回～第七回ではアクションラーニングによる話し合い学習を中心にして、個人とグループでの課題設定の方法論を修得し、実際に個人の学生生活上の課題を題材として話し合いをすすめる。第八回～第十四回では実習グループ演習において、これまでの話し合い学習方法を活かしながら、中間レポート(読書レポート)の内容を発表しあい、グループ全員で「挑み力」とは何かについてまとめ、クラス全体で発表する。そして実習グループ活動を繰り返ることでグループ活動プロセスの流れを体験的に学習できるようにしている。最終レポートでは、すべての授業内容を振り返り、自分の学生生活上のチャレンジ課題について、話し合い学習や実習グループ活動を通して、最終的にどう考えたのか、今後どうしていきたいかについてまとめる。

2. 受講学生個人の課題設定における意識・行動変容例

1) 事例: 体育学部・2年・女子(チームスポーツ系部活に所属)

① 個人の課題設定提示(10月26日)

個人の技術向上とリーダーシップをどう両立させたいのか(自分の考えるリーダーシップとは、チームで大切にしている声を出すこと、全力でやること等を自ら行動で示す。同時にチームをレベルの高いところへ引っ張っていく力だと考える)

② アクションラーニングによる話し合い学習の結果、再設定した課題(11月16日)

リーダーシップをとるためにすべきことは何か(個人の技術力向上に取り組みながら、リーダーシップはとれる。すべて練習中にやろうとするのではなく、普段からやれることは何なのか)

③ 最終レポートでの個人課題への具体的な行動目標(1月30日)

第一に、「普段からたくさんの人とコミュニケーションをとること」、第二に「種目と真摯に向き合い、情熱を行動で表現すること」以上2つは練習外で挑むことである。

2) まとめ

上記の学生は、当初、「個人の技術力向上とリーダーシップ力の向上」にどう取り組んでいくのかということが漠然と頭の中にあっただが、グループで多様な学部、異なる部活に取り組む学生との話し合い学習を通して、練習の中だけで、課題に取り組んでいこうとしていたこと、練習外で行えることがあるのではないかとすることに気づき、行動計画案を考え実行しようとしていた。そして同時に自分ひとりで問題を捉えるのではなく、他人とのやり取りの中で気づいたり、振り返るコミュニケーション的学習プロセスも体験でき、その意義を理解できていた。



成し遂げ力II (演習A)

1. 授業のねらいとスケジュール

本授業ではリーダーシップ、学習する組織、システム思考の知識的理解と体験的理解をねらいとし、特にチームや組織が協働学習の中で、目標を成し遂げていくためのリーダーシップのあり方や、システム思考についてチーム演習を通して学ぶ。特にグループ演習後のリーダーシップジャーニー(リーダーシップの在り方を記録し、毎回の授業を通して振り返ること)を、重視している。授業は、講義と演習の組み合わせで進行し、2回～3回に一度、グループ活動の振り返りのための個人による学習成果を振り返るミニレポート(授業中に執筆)とピアレビュー(グループで、授業で考えたことを聴きあい共有する)を行う。講義では、成し遂げ力およびリーダーシップ、学習する組織にかかわる理論(システム思考など)を学び、演習では、学んだ理論を実践し、実用的な力として身につけるための様々なワーク(質問口、強み・弱み演習、ピアレビュー等)を実施する。第1週から第4週は、【基礎編1】としてリーダーシップ理論の基本を学ぶとともに、ビデオを鑑賞したり、自分たちのリーダーシップ経験を語り合うことでリーダーとしてのコミュニケーションのとり方を体験的に学習する。第6週～第8週は、【基礎編2】として、学習する組織におけるシステム思考の基本を学ぶ。第9週～第12週は、【実践編】では、リーダーシップ開発、システム思考の実践演習のために、プロジェクトマネジメント(下記参照)を疑似的に体験するシミュレーション演習を行う。受講者は、テーマ(東海大学における喫煙マナー改善プロジェクト)の「工程管理」「実行と継続」「分析と修正」に関して演習を行う。第13週以降は【応用編】として、受講者は自分たちの経験について分析・修正を繰り返しながら、リーダーシップ開発・システム思考をベースとした成し遂げ力を身につける。さらに、授業で学んだことを実際の学生生活や将来の社会生活において役立てられるように、汎用性の高い力を身につけることを目指している。

プロジェクトマネジメントシミュレーションとは

学生6人が1グループとなり、プロジェクト(今回は、「東海大学における喫煙マナー改善」プロジェクト)を立ち上げ、プロジェクト活動を疑似体験するシミュレーション。このシミュレーションでは、実際に東海大学が抱えるキャンパスの問題、「喫煙マナー改善」のための企画、実行、修正を経験し、東海大学事務部湘南総務課の担当者に改善提案を行う。

2. 学生のリーダーシップレビュー(10月11日)例

1) 体育学部・4年・女子

リーダーシップをとるうえで、自分の課題だと思うことは、「みんなの意見を聞き、取り入れる事」です。私は、大勢の意見を聞いているとキリがない、まとまらないと考えていました。よってあらかじめ具体的な方向性を示して、理解と同意を得るという方法での話の進め方を良く行っていました。しかし、これではワンマン的で視野の狭い案しか出てこない事もあると気づき、これからの私にとっての課題だと思いました。それと人間関係を大事にしようと思うあまりに本音でぶつかり合えない関係になってしまうことが多くあります。時には本音で人とぶつかるからこそ、本との信頼感が生まれ、より強固な結束となることもあると思います。

2) 工学部・3年・男子

バイト先のバイトリーダーは、理想が高く、やりたいことも他の人には相談せずにオーナーに話して話をすすめてしまう。私が話を聞くころにはその話が決定事項になっているため、仕事に対して責任感がなくなりがちである。バイトリーダーはもっと私たちに相談してほしいし、私たちにも意見できるようにしていかねばならないのではないかと。だから月一回はミーティングのような意見を発表できる場を作ってもいいと思う。

以上の例は、授業の初期(10月上旬)でのリーダーシップの捉え方に関する本人の経験を振り返り、自分の考えを整理している例である。各学生個々のリーダーシップ意識の整理を終えた後に、プロジェクトシミュレーションに取り組むことが授業効果をあげる上で大事であると考えます。

自ら学ぶ意欲を引き出す理系教育プログラム

<学ぶ意欲>を引き出すプロジェクト型教育

大学全入時代の到来、入学選抜方法の多様化による新入生の学力レベル・学修歴・入学目的の多様化に加えて、学習習慣や学習方法が確立されていない学生が入学するようになったことで、多くの大学において現状の大学教育を維持することが困難になりつつある。そこで、チャレンジセンターでは、学生にとって身近な、社会で活用されている最先端技術やその成果としての「モノ」をテーマとしてチームを組んで課題に取り組み、学生の<学ぶ意欲>を引き出す理系教育プログラムを策

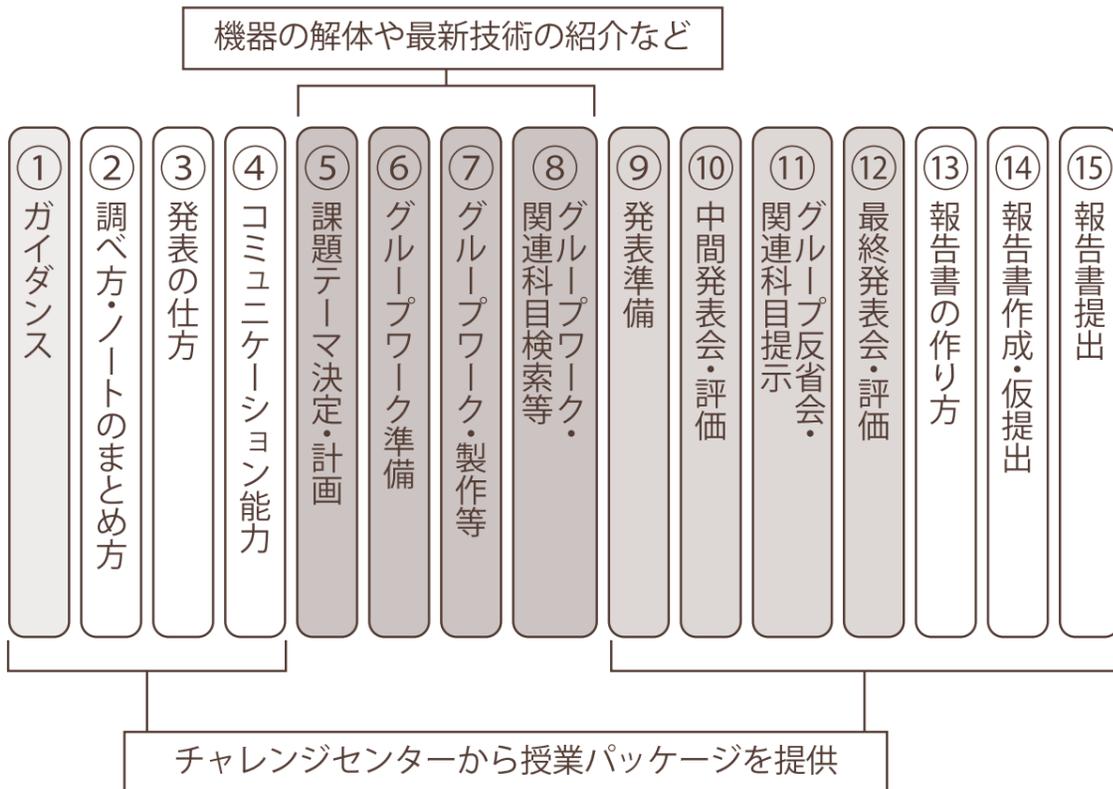
定した。具体的には、理学学部・学科の授業及び研究内容に興味を持たせることを目的とした、

- ①大学生に必要な「自ら学ぶ力」
- ②各学部・学科の専門的知識・技術の成果
- ③体験的な学習 (Active Learning)
- ④プロジェクト型学習(Project Based Learning)を要素とする授業プログラムである。

応用から基礎へ

従来のカリキュラムは基礎科目から応用科目や研究へと進む授業体系となっているのに対し、本プログラムでは、「専門への導入教育」を目的として、学科とチャレンジセンターの教員が「プロジェクト入門A・B・C」の授業を共同で企画・運営する。授業は、図1に示すように、第2週目から第4週目まではノートを取る、図書館で調べるといった<自ら学ぶための技術>を学び、第5週目から第8週目までは、社会で活用されている最

先端技術やその成果としてのモノの仕組みについて、実物を分解し組み立てるなど、実験や実習を通じた体験型授業を行う。グループごとに課題を設定し、中間発表会と最終発表会でプレゼンテーションを行い、報告書を提出させることで、卒業研究に必要な調べる力や発表する力、報告書を作成する力を培う。

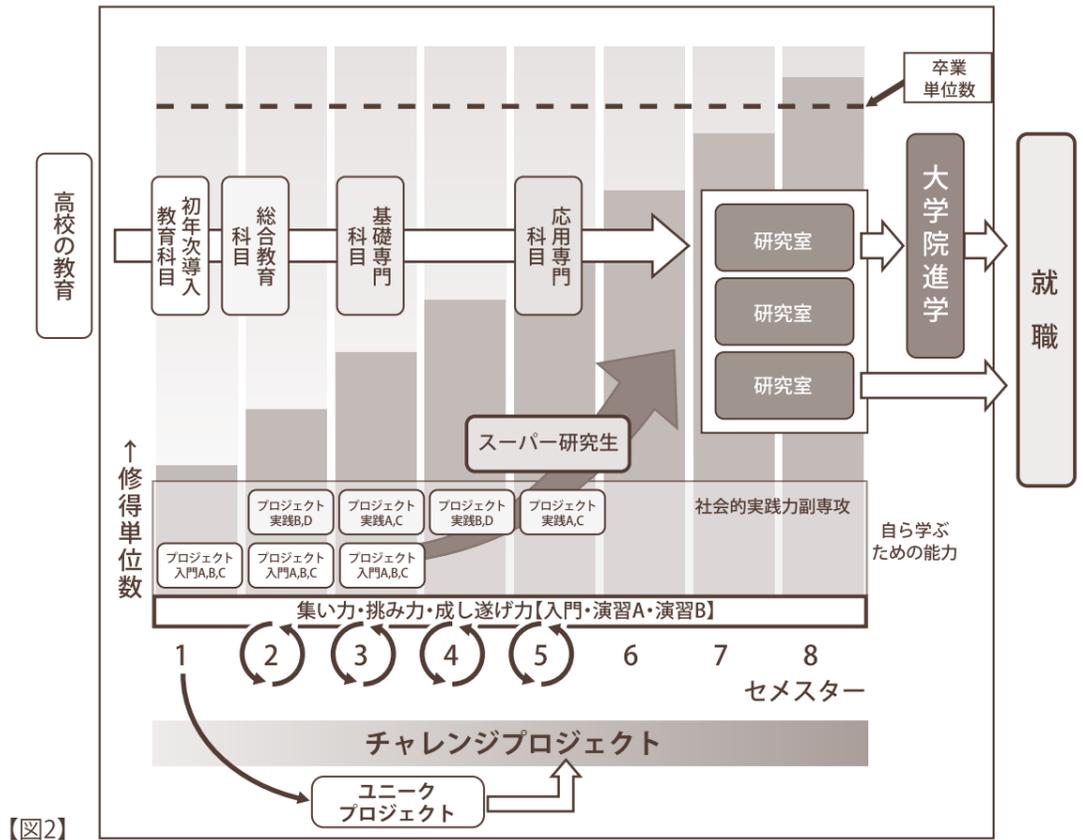


【図1】プロジェクト入門A・B・Cの授業計画(15週)

ユニークプロジェクト、チャレンジプロジェクトの活用

「プロジェクト入門A・B・C」で実験や研究に興味を持った学生は、「ユニークプロジェクト」の募集に応募し、放課後などの時間も利用して基礎力を伸ばす勉強や興味深い研究を始めることができる。各プロジェクトでは必要に応じて教員がアドバ

イザーを担当することもできる。また、「ユニークプロジェクト」をより高度化・拡大させて「チャレンジプロジェクト」の募集に応募することで、学科の専門教育とより深く結びついた「自ら学ぶ」活動を継続することができる。



【図2】

【実施例】

工学部光・画像工学科の渋谷猛久教授とチャレンジセンターの岡田工准教授が秋学期に担当した「集い力(演習B)」で、3Dテレビや3Dデジタルカメラ、3Dパソコン等を利用して、3Dディスプレイシステムをテーマとするプロジェクト型授業を実践した。「3Dの表示方法の比較」「メーカーごとの3Dテレビの比較」「3D用メガネの有無による比較」をそれぞれ課題とするグループに分かれ、発表や報告書の作成を行った。履修者の所属は工学部、理学部、文学部にわたり、やや難しい内容ではあったが、最後まで課題を成し遂げることができた。



チャレンジセンター准教授 岡田工

ジャーナリズム実践教育コース

2010年度より岩田伊津樹教授を新たに迎え、本格的にコースが動き出した。秋semesterでは「文化ジャーナリズム」が新たにコースに加わった。岩田教授とともに開講した「入門」「演習」に加え、「スポーツ」、「環境」、「国際」などが多くの学生を集め、土曜日に開講する「医療・福祉」も伊勢原校舎からの受講者も50人を超えた。初めて開いた「文化」は1年生だけを対象としたが50人以上が集まり、「美術」「文芸」「映画」「大衆音楽」の4分野で授業が行われた。また「フォト」では3年目を迎え、新たな講師による新しいカリキュラムで授業が進められた。

また、8月31日から9月3日まで本学札幌キャンパスに湘南キャンパスの学生を含む24名が集結して、山口勉教授(チャレンジセンター/元読売新聞社)と吉村卓也教授(国際文化学部地域創造学科教授/元朝日新聞社)の指導のもと、サマーセッション(プロジェクト入門II)の講義が行われた。本講義は、昨年9月に初めて実施した「ジャーナリズム実践プロジェクト」第二弾として開催された。「北海道の未来」をテーマに、ジャーナリズム活動に必要な、批判的・客観的に情報を収集・分析・伝達する能力を磨き、その成果をまとめた冊子を作成した。その他にも、月刊誌「中央公論」の4月および10月号では、『大学生が「ニュースの場所」に行く』と題した特集ページにおいて、ジャーナリズム実践教育コース履修生10名による独自テーマの取材とレポートが掲載された。



成果をまとめた冊子

国際ジャーナリズム

授業内容

日本全体が“内向き”志向とされる中で、国際ニュースの理解を促進していくための骨太の輪郭を教えることを目指した。(I)では専らアメリカを取り上げ、①民主主義②多民族国家③超大国(軍事)④日米関係を柱とし、山場を迎えていた普天間問題を掘り下げ、一方で変わりつつある東アジアの安全保障環境について講じた。また核問題、公民権法などでは記録フィルムを教材に使った。(II)では中東と中国をテーマに取り上げ、尖閣諸島漁船衝突事件、チュニジア革命、ウィキリークスなど時事的問題とのからみで授業を進めた。中国では中国革命を中心に日本とのかかわり、中東では石油、イスラム原理主義、戦争、民主主義の理解に力を注いだ。

チャレンジセンター教授 山口勉



マスコミ倫理 マスコミ法制

授業内容

社会正義の担い手として肩で風を切るような存在だったジャーナリズムも、現在では四面楚歌の状態といわれる。ジャーナリズムは本当に社会の敵なのか。「報道は、民主主義社会において、国民が国政に関与するにつき、重要な判断の資料を提供し、国民の『知る権利』に奉仕するものである」。最高裁は、1969年、ジャーナリズムの意義をこのように定義した(博多駅事件)。ジャーナリズムは、社会の敵ではなく社会のために働くのが基本だ。いま問われているのは、軸足をどこに置き、何を伝えるかである。ジャーナリズム活動は、憲法の取材・報道の自由に基づくものだが、報道の自由があるからといって何をしても構わないというわけではない。取材対象者のみならず、関係者への十分な配慮が必要である。要は、取材といえども社会的な常識の枠が大前提だ。過去には、強引な取材や捜査情報一辺倒の“犯人視報道”など社会から厳しく批判される事例があったのも事実である。こうした問題報道例から教訓を学び、再び同じような過ちを繰り返さないためにどうすべきなのか、この授業ではその問題点を掘り下げた。「倫理」というと退屈な、あるいは堅苦しいといった印象があるが、記者としてさまざまな問題取材し、報道する場合、知っていなければならない基本中の基本の行動ルールと言えるだろう。

環境ジャーナリズム

授業内容

「環境」という言葉からは、何を思い浮かべるだろう。ある人は、家の近くにある里山の保護を語り、ある人は、さまざまな汚染物質の健康への影響を論じ、また、ある人は地球全体の問題として温暖化や砂漠化、そして国際河川をめぐる国と国との対立が安全保障上重要だということかもしれない。新聞社が取材する際も、ある特定のセクションだけでは対応しきれないため、多くの場合、社会部や経済部、科学部などからなる編集局横断的な取材班を編成する。環境問題の領域は、このように広く深く、それぞれに対立の図式が存在する場合が多いのが特徴である。ジャーナリズムとして、こうした多様で複雑な問題を公平、公正に伝えてゆくためにはどこから手をつければよいのか。この授業では、直面する課題の内容を探り、それぞれの問題にどういう背景や議論があるのかを理解しようと務めた。対立する問題では、先入観を捨てて必ず双方の意見を聞くこと。また、環境問題には長い議論の中で培われてきた基礎となる原則もある。この授業を通し、こうした環境とジャーナリズムの基本を身につけることに重点を置いた。ジャーナリスト志望でなくても環境問題の基本は、社会人として活躍する際の必須項目の一つである。

チャレンジセンター教授 岩田伊津樹

第1回FD研究会「授業における目標設定と達成度評価」

日時:5月24日(月) 17:00～18:40 場所:湘南キャンパス 8号館3階 プロジェクト会議室 司会:尾崎由佳(チャレンジセンター講師)

1 初年次教育としての「プロジェクト入門」とその評価について

岡田工 チャレンジセンター 准教授

2010年度より「プロジェクト入門」等で試行予定の「自ら学ぶ意欲を引き出す理系教育プログラム」の内容が紹介された。本プログラムは、初年次の学生を主な対象として、身近なモノ(科学技術の成果)を題材にプロジェクト形式で共同研究する作業を通じて基礎の重要性を理解させ、学びの意欲を引き出す取り組みである。「プロジェクト入門」の授業目標は、課題(ミニ・プロジェクト)を企画・運営する体験を通じて、「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」を総合的・応用的に高めることである。さらに、自ら学ぶための汎用的能力(ジェネリック・スキル)として、「調べる力」「発表する力」「コミュニケーションの仕方」「報告書を作る力」なども授業内容に取り入れ、ある程度パッケージ化された形で様々な学部学科に提供できるよう開発を進めている。教育の質を保证するための評価指標としては、「スキル」「学ぶ意欲」「成果物」の3つの面から評価する。

- 1.スキルについてはルーブリックを利用して評価し、
- 2.学ぶ意欲については、学修計画表に基づいた履修ができてきているかを追跡調査するとともに、面談やGPA評価を行う。
- 3.成果物については、シラバスに記載してあるレポートや報告書等にもとづいて評価する。特に、ルーブリックを利用したスキル評価については、チャレンジセンターが積極的に開発と検証を進めていくことが重要だと考えられる。

2 社会的実践力教育におけるルーブリックの使用について～チャレンジセンター科目「集い力」における試み～

園田由紀子 チャレンジセンター 講師

ルーブリックとは、学習到達状況を評価するための評価基準表のことである。ルーブリックには、学習の各要素に関してS、A、B、Cといった段階的な評価基準が含まれている。学習前に学生に提示することによって、「授業においてこのようなことを学び、この程度まで到達してほしい」という指針を伝えることができる。また、学生自身に学習目標を立てさせることや、目標に到達するまでのステップを理解させるためにも役立つ。さらに、このような目標設定を行わせることを通じて、学生の学習意欲を高めることにも効果があると言われている。なお、ルーブリックの実践例として「集い力(入門)」における取り組みが紹介された。特徴としては、

- 1.シラバスにルーブリックを提示すること
 - 2.5項目5段階で設定していること
 - 3.ガイダンス時にルーブリック上で事前自己評価を行わせること
 - 4.終了時にルーブリック上で事後自己評価を行わせること
- の4点である。また、自己評価をする際に「なぜそのような評価をつけたのか」という理由についても記述させることによって、教員がその内容を見て評価の妥当性を判断できるようにしている。このような取り組みの成果として、学生が具体的な学習目標を持てるよ

うになったこと、現状の能力不足に気づき努力や学習の必要性を認識すること、能力を高める・成長するという意識が生まれたことが挙げられる。ただし、今後の課題としては、学生がルーブリックの内容を十分に理解できないまま評価をしているケースや、評価理由について具体的な説明ができないといった点が挙げられ、ルーブリック上での自己評価をそのまま成績評価に反映することには問題がある。

3 質疑応答

- Q 理系教育プログラムの学修計画表の作成・追跡はどのように行うか?
- A 学生の所属学科の指導教員に協力を求めるとともに、学生支援システムの活用も検討している。しかし、学生支援システムは、一人ひとリチェックしていく必要があり、かなり手間がかかる。今後、キーワード検索機能などが加われば、より使用しやすくなるのではないかと。
- Q 学修計画表は、必ずしもそのとおりに履修しなくても、むしろ途中で方向転換することによって改善される場合もあるのでは?
- A 学習計画表作成後に学生の履修希望が変更することも当然ありうる。その場合は、適宜修正しても構わない。質の保証としては、GPAや学科順位を追跡調査すれば、学生の成長の様子が把握できるだろう。
- Q 「応用から基礎へ」という構想だが、科目内容によっては必ずしも応用から始める必要はなく、基礎と応用を並行させたり、むしろ基礎からスタートするほうが好ましい場合もあるのではないかと。基礎や応用といった認識の仕方が、分野によって異なっていることでもあるのでは。
- A 理系、特に工学部では基礎から応用に段階的に進めていくのが基本的プロセスだが、専門分野ごとに何が基礎で何が応用にあたるかの認識が異なっている。各専門分野の事情に応じた授業のパッケージ化を考えていく必要がある。
- Q 社会的実践力教育におけるルーブリックの具体的な達成基準と達成目標は何なのか?また、紹介されたルーブリックでは、レベル2であってもかなり高いスキルが含まれているが、これを使って学生のレベルをきちんと測定できるのか?
- A 授業で教える概念を使ってルーブリックをつくと、授業を受ける前の学生には理解できない単語が入ってしまうことは否めない。しかし、誰にでも理解できる言葉を使ってルーブリックを作成すると、説明がかなり冗長になってしまう。ルーブリックを実際に運用する段になると、どのようにワーディングするか、レベルの設定をどうするかといった点において、かなり難しい問題がある。これらの点については、今後検討を重ねていく必要があると思う。
- Q ルーブリックに照らし合わせて自己評価をするのは難しいのでは。わかりやすい言葉で、妥当な評価ができるようなアンケートにしてはどうか。また、「集い力」「挑み力」「成し遂げ力」の重要性を理解していることを評価する項目があってもよいと思う。
- A 授業内容を正確に表そうとしているため、やや難しい表現になっているかもしれない。授業を通じて理解していくことが大切だと考えている。重要性の理解度を評価することは確かに有用であり、定期試験などでそのような設問を含めることもある。

第3回FD研究会「プロジェクトに関する専門知識とスキル教育: アドバイザーの関わり方について」

日時:10月29日(金) 17:15 ~18:30 場所:湘南キャンパス 8号館3階 プロジェクト会議室 司会:尾崎由佳(チャレンジセンター講師)

1 キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)における平塚ビーチハウスプロジェクトの取り組みについて

杉本洋文 工学部建築学科 教授

ビーチハウスプロジェクトは、市民・学生・行政の3者の協働によって「湘南ひらつか」の魅力を再発見することを目的としている。毎年、学生が主体的にコンセプトを決めて、ビーチハウスのデザインおよび製作を行っている。今年のデザインコンセプトは「珊瑚ドーム」であった。アドバイザーとして指導をする際には、以下の3つを目標としている。

- 1.専門的知識と論理的に考える能力を身につける
 - 2.生きた「情報」と直にふれる「場」を用意する
 - 3.社会人基礎力「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を学生に体得させる
- また、日ごろの指導で心掛けていることとして、以下の点が挙げられる。
- 1.学生は社会人として扱う
 - 2.ホウレンソウ(報告・連絡・相談)の約束
 - 3.本番に向けてたくさんの失敗を経験させる
 - 4.プロジェクトを社会に開き、多くの接点をつくる
 - 5.上下をつくらないフラットな関係づくり
 - 6.学生一人一人の個性を活かす
 - 7.能力の差を補い合うチームワークづくり
 - 8.問題解決は全員で
 - 9.成果や感動は共有する



質疑応答

- Q メンバーが集まる時間はどのようにして調整しているのか?
- A (杉本)定例会の時間が決まっている。学年ごとに集まることができる時間が違うことや、進行に応じて臨時的集まりが必要になることもあるので、随時、時間調整をすることもある。
- Q 作業場はどうやって確保しているのか?
- A (杉本)空いた研究室を使って作業場を設けている。作業場には情報をストックするファイルを作ったり、壁一面に大きな工程表を貼ったりして情報共有を促進している。
- Q デザイン学科以外の学生や、C.A.P.の他チームを巻き込むために、どのようなことを心がけているのか?
- A (杉本)C.A.P.内の3チームの連携については、確かに十分ではないという認識を持っている。しかし、それよりも学外団体との協働や交渉をする場面での難しさを感じている。解決策として、ビーチハウスプロジェクトは運営期間が1カ月間と長く、3チームが協力しないと活動が滞ってしまうため、プロジェクトを通して連携を深めるような指導を心がけている。

第4回FD研究会「ブリティッシュ・コロンビア大学の地域貢献とサービス・ラーニング」

日時:11月29日(月) 17:15 ~18:30 場所:湘南キャンパス 8号館4階 8-402教室 司会:尾崎由佳(チャレンジセンター講師)

1 ブリティッシュ・コロンビア大学の地域貢献とサービス・ラーニング

崔一英 チャレンジセンター 教授

カナダは国家レベルでの移民支援を行っており、国内に多数の移民が暮らす多文化共生社会である。国民の間には社会主義的の理念や助け合い精神が浸透し、ボランティアの先進国と呼ばれる。社会から受けた恩は社会に還元するという思想が広く受け入れられており、15歳以上の25%がボランティア活動に従事するなど、日常生活において当たり前のように社会貢献が実践されている。

ブリティッシュ・コロンビア大学(以下UBC)では、一般市民に大学施設を開放して様々なイベントを開催している。また、貧困地域に拠点を置いたUBC Learning Exchangeと呼ばれるオフィスで市民講座を開くことを通じて、地域活性化を目指すとともに、学生が地域理解を深める機会として役立っている。たとえば、サイエンス学部が主催する無料講座では、コーディネーター・メンター2人・アシスタント学生が指導にあたり、無料の文具や食事券などのサービスも含む手厚い教育を行っている。講義資料や簡易実験は念入りに準備されたものであり、講義スキルも非常に高いことから、教員たちが熱意をもって取り組んでいることがうかがわれる。

UBCのコミュニティサービス・ラーニングは、Community Learning Initiative (CLI) という2006年に創立された組織が中心となって行っている。総額250万カナダドル(5年間)の予算を持ち、1800名(全学生の5%)の参加学生数を目標として活動している。2008年度には1675名の参加があった。参加学生には、1セメスターあたり39時間の活動をする事によって3単位が与えられる。教育補助・農業・エンジニアリングなど幅広い分野にわたる40の団体が参加し、学生を受け入れている。この活動の成果としては、学生の高い満足度や、地域理解への貢献、地域活性化、学生の責任感・実行力・勉強意欲の向上などがあげられる。

2 Tokai International Communication Club (TICC) における取り組みについて

森山美紀子 外国語教育センター 准教授

本プロジェクトは、大学周辺地域に住む外国人や留学生との交流を通して社会貢献・国際貢献を行っている。プロジェクトが発足してから3年目までは活動がうまくいかず、学生間の関係や、学生とコーディネーター及びアドバイザーとの関係も満足のものではなかった。しかし、発足から4年目を迎えた本年度は、ビジョンを持ったリーダーが現れるなど、メンバーが楽しく参加できる環境が整ってきた。アドバイザーとして特に専門知識やスキルが必要とされるわけではないため、学生とはコーディネーターと同様な関わり方となっている。指導をする上では、幹部メンバーとできるだけ頻りに連絡を取り合うように心がけている。また、学生の自主性を重んじるため、教員が指示を出しすぎないように留意している。チャレンジセンターに対する要望としては、活動の性質によって、大会成績など成果が見えやすいプロジェクトもあれば、成果が見えにくいプロジェクトもあることに配慮して欲しい。例えば、年間を通してプロジェクト活動を計画通りに成し遂げることができても、大きな成果であると思われる。また、活動内容によっては少人数の方が効果的な場合もあるため、メンバーの数についても柔軟に考慮してほしい。なお、一昨年まで開催されていたアドバイザーミーティングを再開し、アドバイザー同士が意見交換できる場を設けて欲しい。

質疑応答

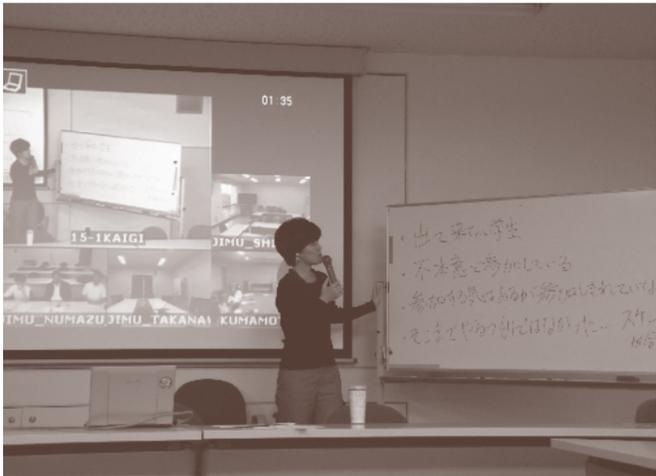
- Q 「成果を挙げることを求める」という点について、どのようなところに問題を感じたのかを教えてください。
- A (森山)今年度の審査で、TICCはチャレンジプロジェクトには採択されず、ユニークプロジェクトとして活動している。審査の際に、開催時期の関係で記入できなかったシンポジウムやセミナーの成果が伝わらなかったこともその理由の一つではないかと推測しているが、審査結果の理由をより分かりやすく示していただくとともに、見えにくい成果についても積極的に評価していただきたい。(センター関係者)審査結果の理由をより分かりやすく示すようにしたい。(杉本)大会やコンテストなどが少ないボランティア系活動の成果を客観的に示すために、支援対象となった団体や、イベントに参加した市民のリアクションを記録してみてもどうか。活動を高く評価してくれていることが可視化されるとともに、学生の励みにもなると思う。また、市長や教育委員会に対し、活動証明書のようなものを依頼することも有効だと思う。

2 質疑応答

- Q CLIには専属の教員や職員がいるのか?
- A 教員は学部学科の所属だが、職員はCLI専属であり人数もかなり多い。予算が豊富にあることがそれを可能にしていると思う。
- Q 市民講座の学生アシスタントは無給ボランティアなのか?
- A 完全無給のようだ。
- Q 活動分野は、地域団体の要請を受けて決定しているのか、それとも大学側が選択しているのか?
- A どちらの場合もあると思う。
- Q 学生のレベルは地域のニーズに合っているか。地域の問題解決に役立っているのか?
- A 学生だけの力で問題解決をさせるのは難しいかもしれないが、教員や職員のサポートによって解決を実現させている。地域住民の側も、学生に対してさほど高度なレベルを要求しているわけではなく、「大学生がやっていることだから」と温かい目で見守っているようだ。
- Q 参加学生は低学年が多いのか?
- A 割合はわからないが、高学年や大学院生も多数参加している。
- Q 研修はどのような内容か?
- A 派遣される学生を対象に、派遣先の団体やその活動を理解するための研修を行っている。また指導する教員に対する研修もある。



ていく」「やる理由を聞いた上で、今後の自分の発展(成長)につながるかどうかを考えると」「スタートした頃の気持ちを全員で振り返る」などの実例や解決策が挙げられた。最後に、ディスカッションのまとめとして、学生のやる気を高めるためにはコーディネーターの適切かつ積極的な指導が重要であるという総括が述べられた。



第1回ミニセミナー「実践コミュニティについて」

日時:5月17日(月)11:50～12:30 場所:東海大学湘南キャンパス 8号館3階プロジェクト会議室 司会:尾崎由佳(チャレンジセンター講師)

実践コミュニティづくりの取組紹介 ～持続的なプロジェクト活動を支えるために～

堀本麻由子 チャレンジセンター講師

チャレンジセンターのプロジェクトを持続可能な活動にしていく上での参考事例として、プロジェクトが相互に学び合い、かつ実践知を共有できるような「実践コミュニティ」の説明と事例紹介が行われた。紹介されたのは、お茶の水女子大学・福井大学・早稲田大学・宇都宮大学が共同で開催している実践研究ラウンドテーブルである。ここでは、さまざまな分野の実践者が職場や地域において自ら実践をふりかえり、次の実践に活かしている。また、少人数のグループで、実践者は試行錯誤の過程をじっくりと語り、グループ内のメンバーは傾聴を通じて、実践を共同で探求できるコミュニティづくりに取り組んでいる。このような事例をプロジェクト活動に応用し、実践の展開を語る場や仕組みを設けることにより、経験知・実践知を継承していくことが可能となる。具体的な方法としては、プロジェクト報告会を実践ラウンドテーブル形式で実施することなどが提案された。



堀本麻由子 チャレンジセンター講師

質疑応答

- Q** 実践コミュニティは何を目的にしているのか。また、どのような利点があるのか。
A 語ることで実践者が成長し、組織に戻ったときに成果を出すことを目指している。また、参加者全員が意識を共有できる利点や、フェイス・トゥ・フェイスでしか伝わらない暗黙知を伝承していくという利点もある。
 なお、このような利点を見込んで、企業でも活用された例がある。
Q 目的を共有する人同士がグループを組むのか。
A そうとは限らない。さまざまなバックグラウンドと問題意識を持った人々が参加している。逆に、多様性から有益な学びがある。
Q 雑談のように経験談を語るような形式なのか。
A もっとフォーマルに行われる。実践者は自らの活動をレジュメにまとめて参加者に配布し、それをもとに2時間ほどかけてじっくりと語る。



第3回ミニセミナー「春学期の授業を振り返る」

日時:10月11日(月)12:05～12:35 場所:東海大学湘南キャンパス 8号館3階プロジェクト会議室 司会:尾崎由佳(チャレンジセンター講師)

春学期の授業を振り返る ～授業参観の結果を参考に～

園田由紀子 チャレンジセンター講師

「挑み力(入門)」について報告した。授業内容としては、身の周りのことについていかに無関心であるかを気付かせるワークや、論理的思考力を育成するためのトレーニングを紹介した。授業参観の結果を受けて、学生のベースよりも授業速度が速かったのではないかと反省点や、適切なペースがどのくらいであるのかを模索したいという改善点が見つかったことが述べられた。また、授業参観の仕方として、1回分の授業を参観するだけでは授業目標や全体的な構成が見えづらいため、授業担当者がシラバス全体について説明を加えた方がよいのではないかという提案がなされた。

岡田工 チャレンジセンター准教授

「プロジェクト入門A」について報告した。授業内容として、「おもしろ理科実験」のデモンストレーション用の教材を作るとともに、説明用のパワーポイントを作り、学生自身に説明させる様子が紹介された。授業参観の結果を受けて、学生たちが授業を通じて成長していく様子がわかり、授業の効果に手ごたえが得られたことが報告された。また、この授業を「自ら学ぶ姿勢を引き出す系系教育プロジェクト」につなげていくために努力したいとの展望が述べられた。

山口勉 チャレンジセンター教授

「ジャーナリズム・ゼミナール」について報告した。教室内にとどまらず、現地へ出向くことを重視しており、その一例として、厚木基地の見学会を行ったことが報告された。学生たちが英語で質問できなかったことや、非日常の体験から多くのことを学ぶ機会になったことが紹介された。また、今後の改善点として、見学先のアポイントメントを学生にとらせることなどが述べられた。



園田由紀子 チャレンジセンター講師



岡田工 チャレンジセンター准教授



山口勉 チャレンジセンター教授



質疑応答

- Q** (山口先生へ) 学生をどこまでサポートするべきか。学生たちが見学先を選ぶことはできるのか。
A A. 学生たちが見学先の選定を行うこともある。春学期にも、学生の希望を受けて山梨県の青木ヶ原樹海の見学を行った。
Q (山口先生へ) 今の学生は、社会の時事問題についての知識が非常に少ないという前提に立たねばならないのでは。知識が浅すぎる学生を現場に連れていってどのような意義があるのか。どのような事前準備をしているのか。
A 自衛隊・米軍や日米安全保障条約などに関して、事前に数回にわたり教えた。質問者と同様の疑問を抱いており、知識不足を感じている。必要な情報は与えていかなければならないと思っている。しかし、情報を与えず消化不良になっているのではとも危惧している。
Q (岡田先生へ) 理科実験のテーマはどうやって決めているのか。
A グループ分けをした後、グループごとに自主的に決めさせている。新たな実験を一から作り出すわけではなく、既存の実験例がインターネット上に紹介されているので、その中から選択させている。インターネット上の説明どおりに実施したとしても、実際に実験してみると、学生は失敗してしまうことがほとんどなので、失敗を通じた学びができるように指導している。
Q 本来は、他学科の授業を見学するのが良いのではないか? その方が客観的な批判ができるのではないか。
A 大学の制度としては、どの学部・センターの授業でも見学できるようになっている。今後は、チャレンジセンターの教員がセンター外の授業を見学したり、センター以外の教員がチャレンジセンター科目を見学しにくるという交流をもっと推奨していければ良いと思う。
A 以前も、学部の先生が初年次教育の参考にしたいとのことで、センターの授業を参観に来られたことがあった。

第2回ミニセミナー「リーダーシップについての考え」

日時:6月7日(月)12:15～12:45 場所:東海大学湘南キャンパス 8号館3階プロジェクト会議室 司会:尾崎由佳(チャレンジセンター講師)

リーダーシップについての考え方 ～成し遂げ力IIの授業から～

堀本麻由子 チャレンジセンター講師

尾崎由佳 チャレンジセンター講師

チャレンジセンターの「新しいリーダーシップのあり方」について考えることを目的として、発表および議論を行った。まず、チャレンジセンター科目「成し遂げ力II」において教えているリーダーシップの概念や理論を紹介し、現代社会で求められる新しいリーダーシップである「チームマネジメント型リーダーシップ」を考える上で重要なポイントを指摘した。続いて、リーダーシップに含まれる要素や、「ビジョン型」「民主主義型」「親和型」「コーチ型」「強圧型」「先導型」などのスタイル分類について説明し、それぞれのスタイルがチームにもたらす効果について考察した。最後に、参加者各自が自らのリーダーシップ・スタイルについて自己評価するワークを体験した。

質疑応答

- Q** リーダーシップ・スタイルは自己評価するよりも他者評価の方が正確なのではないか。
A 確かに、自己評価は不正確になりがちである。自らが評価した内容と、他者に評価してもらった内容が食い違うことはしばしばあり、概して他者評価の方がより実態をよく表していると言われる。ただし、日頃の自分のリーダーシップのありかたを内省するきっかけとして自己評価を試みることは意味のあることだと考える。
Q 年功序列制が崩れた現代社会では、リーダーもひとつの役割として位置づけられ、交代可能なものになっているのではないか。
A リーダーが交代可能という指摘はそのとおりだと思う。また、リーダーに限らず、全てのチームメンバーがリーダーシップを発揮することが重要だと教えている。
Q チームマネジメント型リーダーシップは、評価主義・成果主義とは異なり、プロセスを重視しているのか。
A もちろん成果も大事ではあるが、その成果をもたらすためのプロセスを重視していると言える。成果を目指すプロセスにおいて、どのようにリーダーシップを発揮できるかが鍵だと考えている。



尾崎由佳 チャレンジセンター講師



第4回ミニセミナー「キャリア支援センターの取組について」

日時:11月15日(月)12:00～12:30 場所:東海大学湘南キャンパス 8号館3階プロジェクト会議室 司会:尾崎由佳(チャレンジセンター講師)

内藤耕 キャリア支援センター次長

われわれが現代社会を生き抜くためには、自分の人生について主体的かつ戦略的に意思決定をしていく必要がある。学生がそのような人生を歩めるよう、キャリア支援センターでは学生生活に対するモチベーションの向上、コミュニケーション力の強化、自己分析力の養成、卒業後のビジョン構築などを目的としたキャリア教育を実施している。

これらの目的に向けて、初年次からいきなり「働くこと」の意味について考えさせることはせず、高校生から大学生への移行を促進し、危機を乗り越える力(他者とつながる力・社会と向き合う力・将来を展望する力)を伸ばしていく教育を行っている。具体的には、学部を超えたクラス編成による授業を通ってコミュニケーション力を養っている。

たとえば「キャリア設計1」の授業では、学生に「大学に入ってよかった」と実感させるとともに、大学生活での様々な可能性に気付かせ、モチベーションを高めていくことを目指している。「キャリア形成1」の授業では、グループで社会人訪問を行うことを通じて、業界や職業について学ばせるとともに、異世代とのコミュニケーションの訓練を行っている。訪問のスケジュール調整に苦労しているが、学生にとっては貴重な経験になっているよう



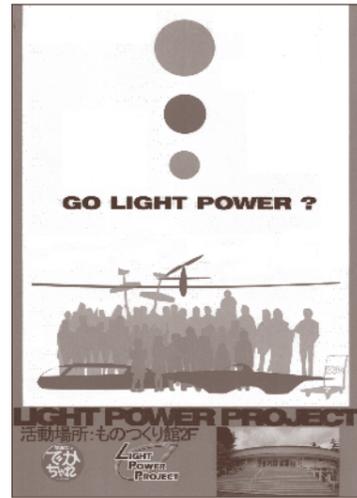
内藤耕 キャリア支援センター次長



である。また「模擬面接会」を開催し、同窓生・企業人の協力を得て就職面接のデモンストレーションを行い、実際の就職試験に向けた対策を講じている。指導はキャリアコンサルタントの資格を持つ者が担当している。なお、指導者を対象にして徹底したFDを行うとともに、同一名の科目においては統一されたテキストおよびシラバスを用いることで教育レベルの統一を図っている。

質疑応答

- Q** 経済産業省が「社会人基礎力グランプリ」を開催していると聞いたが、どのような応募要件なのか。
A 社会人基礎力の育成に関わる大学授業の取り組みを募集している(課外活動は除外)。チャレンジセンターの取り組みは、集い力・挑み力・成し遂げ力の育成を実施しているために要件をほぼ満たしていると思われるが、社会人基礎力との関係を明確に示す工夫が必要になると思う。詳しくは経済産業省のホームページ等で確認して欲しい。
Q キャリア科目の履修者の数はどのくらいか?
A 人数を70名に制限しており、どのクラスもおおよそ60名程度におさまっている。「キャリア形成」など希望者が多い科目の場合は90名近くになることもある。
Q どのような学生が受講しているか?
A モチベーションの高い学生が多い。しかし、やる気はあるもののコミュニケーション能力に欠けるといった問題が見受けられることもある。
Q キャリアの導入教育はいつごろが適当なのか?
A 教育の効果はすぐにあらわれるものではないので、1年生で教わったことが卒業近くになって効果を出すこともある。自分の経験上、2年生から3年生にかけて学生は大きく変化を遂げるので、その変化にあわせて教育内容も工夫していくことが必要だと思う。
Q 就業力GPIに取り組み中である一番の課題は何だと思うか?
A 課題ではないが、補助事業費を規程通りに適切に運用することに細心の注意を払っている。社会人基礎力の育成は、卒業後の社会人生活だけに役立つものではなく、大学における研究・教育においても役立つ汎用性の高いスキルであると思う。大学は就職予備校ではないということ意識して教育を行っている。
Q 卒業後、どのような職場でどのように働くのかという具体的なイメージを持たせることが重要なのではないか。
A 確かに、具体的なイメージを抱かせることは学生の成長のために役立つと思う。ただし可能性を限定せず、どんな環境においても自分の能力を発揮できるような学生を育成していきたい。



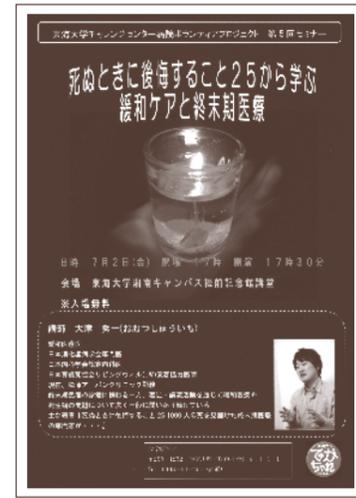
ライトパワープロジェクト



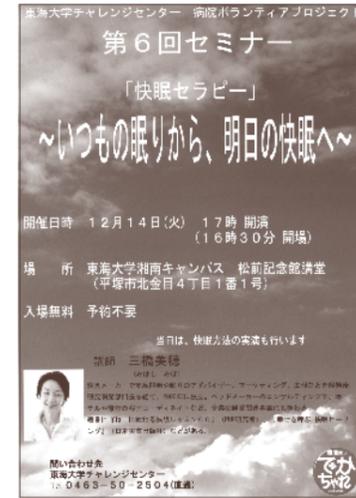
Tokai Formula Club



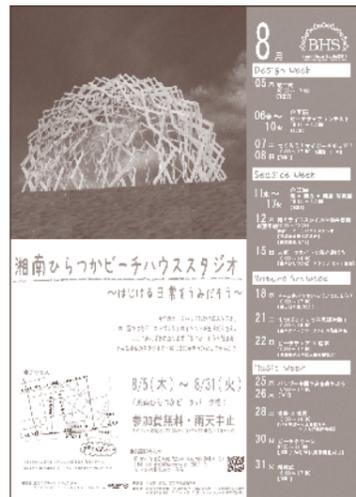
東海大学学生ロケットプロジェクト



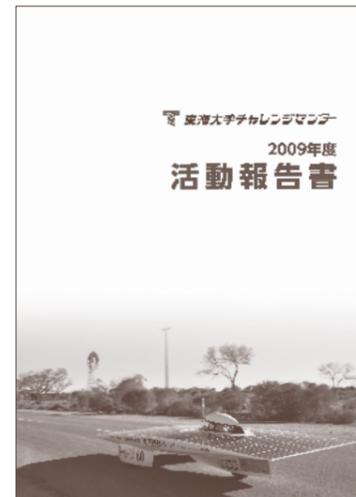
病院ボランティアプロジェクト



スポーツ社会貢献プロジェクト



キャンパスストリートプロジェクト



チャレンジセンター



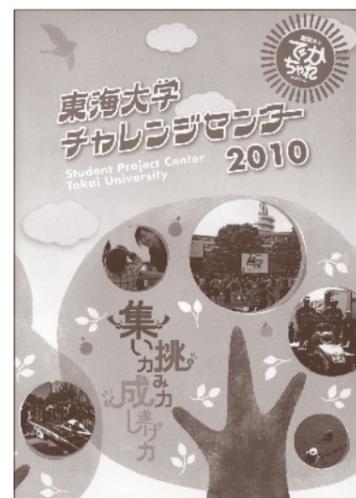
キャンパスストリートプロジェクト



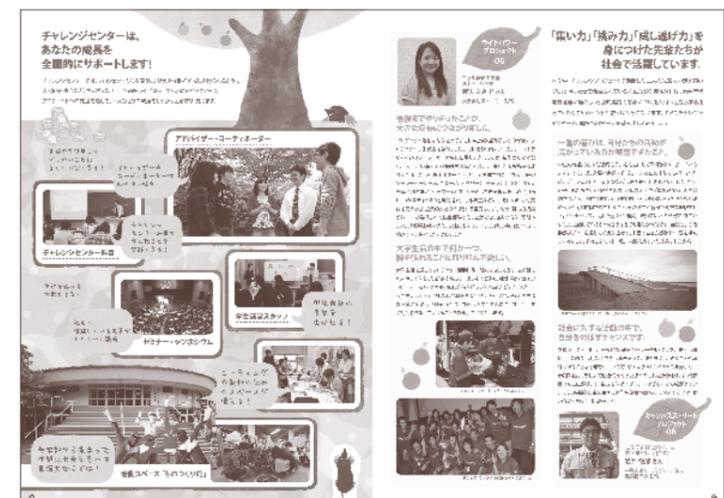
Music Art Project



サイエンスコミュニケーター



チャレンジセンター



ニュースリリース(湘南キャンパス)

月日	内容
4月17日	ライトパワープロジェクト「科学技術チャレンジフェア2010」
6月29日～7月1日	キャンパスストリートプロジェクト「TOKAI 音食 WEEK」
7月2日	病院ボランティアプロジェクト 第5回セミナー「「死ぬときに後悔すること25」から学ぶ緩和ケアと終末期医療」
7月14日	ライトパワープロジェクト 秦野市立大根小学校4年生対象の「ソーラーカー・電気自動車を利用したエコカー教室」
8月2日	ライトパワープロジェクト「サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジ2010」参観計画発表
8月5日～31日	キャンパスストリートプロジェクト「ビーチハウス」を建設
8月12日	キャンパスストリートプロジェクト「ビーチハウス 港のライフスタイル体験@新港」
8月13日	キャンパスストリートプロジェクト「ビーチハウス 港のライフスタイル体験@新港」延期のお知らせ
9月9日	ライトパワープロジェクト「サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジ2010」駐日南アフリカ大使が訪問
9月11日	サイエンスコミュニケーターによる科学教室「科学の世界へようこそ」～子どもの夢と未来を切り拓こう～
9月13日～17日	東海大学チャレンジセンター「環境キャラバン隊」～身近なエコ活動を伝える「環境教室」を小学校4校にて実施～
10月1日	キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)「ひらつかビーチハウスプロジェクト2009」が「2010年度グッドデザイン賞」を受賞
10月4日	ライトパワープロジェクト「サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジ2010」総合優勝
10月16日	チャレンジプロジェクト「中間報告会」
10月20日	「サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジ2010」駐日南アフリカ共和国大使に優勝報告
11月13日	キャンパスストリートプロジェクト(C.A.P.)の「HIRATSUKA Beach House Project 2009」が「2010年アメリカ建築家協会デザイン大賞(学生部門)」を受賞
11月25日	キャンパスストリートプロジェクト 2010年アメリカ建築家協会(AIA) デザイン大賞(学生部門)を受賞
12月6日～25日	キャンパスストリートプロジェクト「クリスマスユナイト」
12月14日	病院ボランティアプロジェクト主催 第6回セミナー「快眠セラピー」～いつもの眠りから、明日の快眠へ～
12月18日	病院ボランティアプロジェクト 第7回癒しのイベント「楽しこの夜～あなたに届け、ハッピーソング～」
12月22日	Music Art Projectによる「X'mas Concert 2010」
1月8日	スポーツ社会貢献プロジェクト「第3回東海大学スポーツ教室DAY」
2月16日	Music Art Project 結成5周年記念オペラ「CAMELIA(カミーリア)」
2月21日	チャレンジセンター「2010年度プロジェクト最終報告会」を開催
2月24日	東海大学チャレンジセンター 学生プロジェクト「環境キャラバン隊」「身近なエコ」をテーマに「環境教室」を実施(伊勢原市立石田小学校)
2月25日	東海大学チャレンジセンター 学生プロジェクト「環境キャラバン隊」「身近なエコ」をテーマに「環境教室」を実施(小田原市立桜井小学校)

メディア露出一覧

2011年2月現在

プロジェクト名	月日	分類	媒体名
ライトパワープロジェクト	1月	書籍	(株)ポプラ社 「総合百科事典ポプラディア(新訂版)」
	4月 3日	その他	科学ライブショー・ユニバース
	4月 6日	T V	テレビ大分(TOS)
	4月17日	T V	福岡放送(FBS)
	4月17日	T V	中京テレビ(CTV)
	4月19日	その他	(株)ジーニアスエデュケーション 進学塾「サビックス」
	4月21日	新聞	静岡新聞
	4月28日	新聞	日刊スポーツ
	5月10日	Web	(株)日本デジコム
	5月13日	情報誌	(株)木楽舎「SMILE AFRICA」
	5月14日	Web	朝日新聞社「asahi.com」
	5月22日	T V	鹿児島読売テレビ
	5月23日	T V	AAB 秋田朝日放送 「2010 ワールドエコノムープ」
	5月23日	新聞	東愛知新聞
	5月28日	T V	テレビ朝日「タモリ倶楽部」
	5月31日	T V	日本テレビ「news every.」
	6月 1日	書籍	どりむ社「自然の力を生かす! 再生可能エネルギーの大研究」
	6月 4日	T V	テレビ東京「たけしのニッポンのミカタ」
	6月 5日	T V	熊本県民テレビ
	6月 5日	雑誌	木楽舎「ソトコト」
	6月14日	情報誌	(株)クオンタム「唐人結」
	6月16日	雑誌	(株)交通タイムズ社「active vihide」
	6月16日	新聞	福井新聞
	6月17日	新聞	日刊県民福井
	6月17日	新聞	中日新聞
	6月18日	T V	FBC福井放送「イケてる福井」
	6月18日	新聞	朝日新聞社
	6月19日	ラジオ	福井放送
	6月19日	ラジオ	福井放送
	6月20日	新聞	福井新聞
	6月24日	書籍	東海教育研究所 「オーストラリア縦断3000kmの挑戦 ～世界最速のソーラーカー」
	6月19日・20日	その他	東北電力「環境にやさしい車展」

プロジェクト名	月日	分類	媒体名
ライトパワープロジェクト	9月	書籍	ナツメ社「自動車のメカニズム」
	6月19日	新聞	東奥日報
	6月19日	新聞	高知新聞
	6月19日	新聞	徳島新聞
	6月21日	新聞	山口新聞
	6月23日	新聞	山梨日日新聞
	6月28日	新聞	信濃毎日新聞
	6月11日～20日	T V	FBC福井放送 CM
	7月 1日	Web	シャープ株式会社「社会環境活動」
	7月 3日	新聞	中部経済新聞
	7月 3日	新聞	愛媛新聞
	7月 5日	情報誌	日本機械学会関東支部 「メカトップ関東 No.28」
	7月 5日	新聞	岐阜新聞
	7月 6日	新聞	日本海新聞
	7月11日	新聞	神戸新聞
	7月12日	新聞	北日本新聞
	7月14日	T V	TVK「tvkニュースハーバー」
	7月14日	新聞	熊本日日新聞
	7月14日	新聞	千葉日報
	7月15日	新聞	読売新聞
	7月15日	雑誌	八重洲出版「AUTO CAMPER」
	7月15日	新聞	神奈川新聞
	7月21日	新聞	教育学術新聞
	7月31日	新聞	高知新聞
	8月 1日	雑誌	木楽舎「ソトコト」
	8月 2日	Web	株式会社イード「RBB TODAY」
	8月 3日	新聞	東京中日スポーツ
	8月 3日	新聞	日刊工業新聞
	8月 3日	新聞	電波新聞
	8月 3日	新聞	苫小牧民報
	8月 3日	Web	Car Watch
	8月 3日	Web	レスポンス自動車ニュース
	8月 4日	新聞	日刊工業新聞
	8月 4日	新聞	電気新聞
	8月 4日	Web	ECO JAPAN
	8月 5日	T V	NHK BS1「ガッちゃん!」
	8月 9日	新聞	家電流通新聞

プロジェクト名	月日	分類	媒体名
ライトパワープロジェクト	8月14日	情報誌	タウンニュース
	8月16日	新聞	神奈川新聞
	8月25日	新聞	読売新聞
	8月25日	新聞	日刊工業新聞
	8月26日	新聞	朝日新聞
	8月26日	情報誌	(株)マイカー現代社「中古車ガイド」
	8月27日	新聞	科学新聞
	9月 1日	新聞	朝日新聞
	9月 3日	Web	asahi.com
	9月 4日	Web	毎日新聞デジタル
	9月18日	T V	読売テレビ
	9月23日	T V	テレビ金沢
	9月24日	T V	読売テレビ
	9月25日	ラジオ	中国放送RCC
	9月25日	ラジオ	山陰放送BSS
	9月25日	ラジオ	山陽放送RSK
	9月25日	ラジオ	山口放送KRY
	9月18日	情報誌	タウンニュース
	9月23日	T V	読売テレビ
	9月29日	T V	テレビ金沢
	10月 1日	雑誌	教育開発研究所「月刊教職研修」
	10月 1日	雑誌	ぎょうせい「はるか★プラス」
	10月 1日	その他	シャープ株式会社「Environmental and Social Report2010」
	10月 1日	Web	WIRED
	10月 4日	T V	TVK「ニュースハーバー」
	10月 4日	T V	TVK「ニュース930」
	10月 4日	Web	読売新聞
	10月 5日	新聞	日本経済新聞
	10月 5日	新聞	朝日新聞
	10月 5日	新聞	読売新聞
	10月 5日	Web	Sankei Biz
	10月 5日	Web	Car Watch
	10月 5日	Web	デイリースポーツ
	10月 5日	新聞	共同通信
	10月 5日	新聞	静岡新聞
	10月 5日	新聞	下野新聞
	10月 5日	新聞	京都新聞
	10月 5日	新聞	熊本日日新聞
	10月 5日	新聞	山陰中央新報
	10月 5日	新聞	中日新聞
	10月 5日	新聞	岩手日報
	10月 5日	新聞	北日本新聞
	10月 5日	新聞	東奥日報
	10月 5日	新聞	宮崎日日新聞
	10月 5日	新聞	秋田魁新報
	10月 5日	新聞	岐阜新聞
	10月 5日	新聞	奈良新聞
	10月 5日	新聞	フジサンケイビジネスアイ
	10月 5日	新聞	電波新聞
	10月 5日	新聞	琉球新報
	10月 5日	新聞	大阪日日新聞
	10月 5日	新聞	日本海新聞
	10月 5日	新聞	伊勢新聞
	10月 5日	新聞	千葉日報
	10月 5日	新聞	日経産業新聞
	10月 5日	新聞	日刊電気通信
	10月 5日	新聞	日経自動車新聞
	10月 5日	新聞	日刊 CARGO
	10月 5日	情報誌	エムスリー株式会社 「湘南いどばた会議」
	10月13日	新聞	毎日新聞
	10月16日	ラジオ	FM フジ
	10月21日	新聞	朝日新聞社
	10月21日	新聞	東京中日スポーツ
	10月26日	雑誌	三栄書房「ニューモデルマガジンX」
	10月29日	T V	TVK「ニュース FRIDAY」
	10月30日	T V	YBS 山梨放送「ヤマナンプロデュース」
	11月 8日	書籍	ナツメ社「史上最強カラー図解 プロが教える自動車のメカニズム」
	11月10日	雑誌	交通タイムズ社「XaCAR 12月号」
	11月16日	その他	パナソニック株式会社プレスリリース
	11月16日	Web	asahi.com
	11月22日	Web	独立行政法人科学技術振興機構 (JST)「かがくナビ」
	12月 1日	雑誌	木楽舎「ソトコト」
	12月 7日	T V	CNN「Inside Africa」
	12月14日	Web	シャープグローバルソーラーウェブサイト
	12月22日	新聞	朝日小学生新聞
	12月22日	その他	RS コンポーネンツ

プロジェクト名	月日	分類	媒体名
ライトパワープロジェクト		新聞	スロバキア 「Czech Electrical Journal」
		雑誌	スロバキア 「Casopis EE pre elektrotechniku a informatiku」
		雑誌	RS コンポーネンツ「eTech」
Tokai Formula Club	9月25日	雑誌	三栄書房「ニューモデルマガジンX」
	10月15日	雑誌	三栄書房「Motor Fan Illustrated」
東海大学学生 ロケットプロジェクト	8月16日	新聞	北羽新報
	8月18日	新聞	北羽新報
	8月19日	新聞	北羽新報
キャンパスストリートプロジェクト	4月 3日	情報誌	タウンニュース
	4月28日	新聞	日刊スポーツ
	6月26日	情報誌	タウンニュース
	6月30日	新聞	日本農業新聞
	8月 5日	Web	タウンニュース
	8月 7日	ラジオ	ナバサ 「FUN FUN FUN ～楽しいを見つけよう～」
	8月 日	新聞	神奈川新聞
	8月11日	新聞	読売新聞
	8月14日	新聞	毎日新聞
	8月14日	Web	読売新聞社「YOMIURI ONLINE」
	8月17日	新聞	神奈川新聞
	8月25日	ラジオ	TVK「キャンパスバレット」
	8月31日	新聞	読売新聞
	9月21日	T V	湘南ケーブルネットワーク
	9月22日	T V	湘南ケーブルネットワーク
	9月23日	T V	湘南ケーブルネットワーク
	9月24日	T V	湘南ケーブルネットワーク
	9月25日	T V	湘南ケーブルネットワーク
	9月26日	T V	湘南ケーブルネットワーク
	9月27日	T V	湘南ケーブルネットワーク
	11月25日	新聞	建設通信新聞
	12月10日	新聞	神奈川新聞
	12月10日	Web	神奈川新聞社「カナロコ」
	3月 1日	雑誌	新建築
環境キャラバン隊	8月 8日	新聞	神奈川新聞
	9月14日	新聞	神奈川新聞
	9月18日	情報誌	タウンニュース
	9月28日	新聞	日刊工業新聞
	10月23日	Web	NPO 法人ふるさと環境市民
	12月 1日	雑誌	朝日新聞出版 「Monthly Junior AERA」
Music Art Project	1月26日	T V	TVK「ハマランチョ」
	1月27日	情報誌	タウンニュース
	1月27日	Web	yahoo
	1月27日	Web	asahi.com
	1月27日	Web	livedoor
	1月27日	Web	nifty
	1月28日	Web	タウンニュース
	1月28日	情報誌	タウンニュース
	2月 1日	情報誌	伊勢原市役所「広報いせはら」
	2月 7日	T V	TVK「tvk ニュースハーバー」
	2月 8日	新聞	毎日新聞
	2月 9日	新聞	日経新聞
	2月 9日	新聞	神奈川新聞
	2月22日	新聞	日刊スポーツ
サイエンスコミュニケーター	9月14日	新聞	庄内日報
	9月17日	新聞	山形新聞
病院ボランティアプロジェクト	12月10日	新聞	日経新聞
スポーツ社会貢献プロジェクト	4月28日	新聞	日刊スポーツ
	1月15日	情報誌	タウンニュー
三保活性化プロジェクト	1月12日	新聞	静岡新聞
阿蘇援農コミュニティプロジェクト	8月 3日	T V	NHK 熊本
福祉除雪プロジェクト	7月 2日	新聞	北海道新聞
	7月17日	T V	北海道テレビ「ウィークリー赤れんが」
	7月17日	T V	テレビ北海道「ウィークリー赤れんが」
	7月18日	T V	北海道文化放送「ウィークリー赤れんが」
	7月18日	T V	北海道放送「ウィークリー赤れんが」
	7月18日	T V	札幌テレビ放送「ウィークリー赤れんが」

2010年度活動一覧

4月						
月	火	水	木	金	土	日
			1 ユニークプロジェクト応募開始	2	3	4
5 [湘南] チャレンジセンターガイド	6	7	8	9	10	11 [湘南] キャラバン: アトム通員オープニングイベント
12	13	14	15	16	17 [湘南] 科学技術チャレンジフェア	18
19	20 [札幌] 企画発表会 [阿蘇] 企画発表会	21 [清水] 企画発表会 [熊本] ACOT: 付属第二高等学校で技術講習	22	23	24	25
[湘南] チャレンジプロジェクト企画発表会						
26	27 第1回プロジェクト協議会(全校舎)	28	29	30		

5月						
月	火	水	木	金	土	日
3	4	5 [湘南] スポ社: 秦野子ども祭り	6	7 ユニークプロジェクト応募締切	8 [湘南] スポ社: 東海ノルディックウォーキング	9
[湘南] ライトパワー: 2010 World Econo Move予選	[湘南] ライトパワー: 2010 World Econo Move本戦	10	11	12	13 [湘南] ライトパワー: 第5回ロハスデザイン大賞2010「ソーラーカーTokai Challenger展示」(新宿御苑)	14
17	18	19	20	21	22 [湘南] ライトパワー: 中学生のつくり教室 ~バッテリー(EO)自転車を作ってみよう!	23
24	25 [湘南・清水] 第2回プロジェクト協議会	26	27	28 [湘南] ライトパワー: テレビ朝日「タモリ倶楽部」出演	29	30
31						

6月						
月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5 [湘南] ライトパワー: 「第5回ロハスデザイン大賞」受賞	6 [湘南] キャラバン: 若者と区民の環境会議 [湘南] TFC: SHCCミーティング
7	8	9	10	11 [湘南] ACOT: 「ロボットを作って動かそう!」	12	13 [湘南] サイエンス: 科学教室 [札幌] 福祉除雪: 土砂災害防災訓練
14	15	16	17	18	19 [熊本] ACOT: オープンキャンパスでロボット講習	20
21	22	23	24	25	26 [湘南] ライトパワー: 2010年日本APECエネルギー大臣会合Tokai Challenger出展	27
28	29	30				
	[湘南] C.A.P.: TOKAI音食WEEK					

7月						
月	火	水	木	金	土	日
			1 [札幌] 福祉除雪: 北海道知事との座談会	2 [湘南] 病ボラ: セミナー 「死ぬときに後悔すること25から 学ぶ緩和ケアと終末期医療」	3 [湘南] TFC: 「学生フォーミュラ車 テスト走行会」参加	4
5	6	7	8	9 第3回プロジェクト協議会 (全校舎)	10	11 [湘南] スポ社: ゼロから 始めるスポーツ体験教室
12	13	14 [湘南] ライトパワー: エコカー教室開催	15	16	17	18 [湘南] サイエンス: 「水」をテーマにした科学教室
[湘南] C.A.P.:「HIRATSUKA Beach House Project 2010」施工						
19	20	21	22	23	24	25 [湘南] ロケット:「大学宇宙 工学コンソーシアム総会」出席
[湘南] C.A.P.:「HIRATSUKA Beach House Project 2010」施工						
26	27	28	29	30	31 [湘南] ライトパワー: 「ものづくり教室」開催	
[湘南] C.A.P.:「HIRATSUKA Beach House Project 2010」施工						
						[湘南] TFC:「キッズエンジニア2010」出展

8月						
月	火	水	木	金	土	日
2	3	4	5 [湘南] 病ボラ: 癒しのイベント [熊本] ACOT: 技術支援高校が「WRO」に出場	6 [湘南] サイエンス: 大学体験授業	7	8
[阿蘇] 阿蘇援農: 援農活動						
[湘南] TFC: 富士走行会						
9	10	11	12	13	14	15
[湘南] C.A.P.: ひらつかビーチハウス開催						
[阿蘇] 阿蘇援農: 春季援農活動実施						
[湘南] C.A.P.: ひらつかビーチハウス開催						
16 [湘南] キャラバン: びっくり! エコ100選 エコロジーの環境教室	17	18	19	20 [湘南] TFC: もてぎ試走会	21	22
[湘南] ロケット: 第6回能代宇宙イベント						
[湘南] C.A.P.: ひらつかビーチハウス開催						
23	24	25	26	27	28	29
[阿蘇] 阿蘇援農: 援農活動						
[湘南] C.A.P.: ひらつかビーチハウス開催						
30	31					
[湘南] C.A.P.: ひらつかビーチハウス開催						

9月						
月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4 [湘南] ライトパワー: 「暮天: プリズム・ソーラーカー」連載開始 [熊本] ACOT: ETロボコンに出場	5
6	7	8	9 [湘南] 病ボラ: おしゃべり映画会	10	11 [湘南] サイエンス: 科学教室 [阿蘇] 阿蘇援農: 援農活動	12
[湘南] TFC: 第7回全日本学生フォーミュラ大会						
13	14	15	16	17	18	19
[阿蘇] 阿蘇援農: 援農活動						
[湘南] キャラバン: 夏季キャラバン実施						
20	21 [湘南] ロケット: ロケット教室	22	23	24	25	26
[湘南] ライトパワー: South African Solar Challenge 2010						
27	28	29 プロジェクト協議会 (全校舎)	30			
[湘南] ライトパワー: South African Solar Challenge 2010						

10月						
月	火	水	木	金	土	日
				1	2 [湘南] C.A.P.: 全国ボランティア 学習研究フォーラム	3 [湘南] ロケット: ロケット教室
				[湘南] ライトパワー: South African Solar Challenge 2010	8	9 [湘南] スポ社: 大根ふれあい祭
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13 [湘南] ライトパワー: 「四首長地球温暖化防止表彰」受賞	14	15	16 プロジェクト中間報告会& 第7回チャレンジセンターセミナー	17
18	19	20	21 [湘南] 病ボラ: ミニ運動会	22 [湘南] ライトパワー: 厚木基地ソーラーカー展示	23 [湘南] スポ社: ハロースポーツプロジェクト	24 [湘南] キャラバン: あやせ環境展
25 プロジェクト協議会 (全校舎)	26	27	28	29 [湘南] MAP: 11/3コンサート ゲネプロ	30	31

11月						
月	火	水	木	金	土	日
1	2	3 ホームカミングデー	4	5	6	7
第56回東海大学建学祭 Link						
8	9	10	11	12	13 サイエンス: 実験教室	14
15	16	17	18	19	20 [湘南] キャラバン: くすのきまつり [湘南] スポ社: サボセンフェスタ	21
22	23	24 [札幌] 福祉除雪: 安全・安心・まちづくりシンポジウム	25	26	27	28 [湘南] ライトパワー: 「ものづくり教室」開催 [湘南] TFC: SHCCミーティング
29 [湘南] C.A.P.: ThLive! Vol.12発行	30 プロジェクト協議会 (全校舎)					

12月						
月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4 [湘南] キャラバン: 富士環境フェア	5 [清水] 三保: 東海大学バンドフェスティバル
6	7	8	9 [湘南] サイエンス: クリスマスU-night! ★手のひらツリーを作ろう!★	10	11	12 [清水] 三保: キッズランド
[湘南] ライトパワー・キャラバン: エコプロダクツ2010						
13	14 [湘南] 病ボラ: 第6回セミナー 「快眠セラピー」 [札幌] 福祉除雪: 出陣式	15 [湘南] C.A.P.: クリスマスU-night! ★クリスマスカード作り★	16	17	18 [湘南] 病ボラ: 癒しのイベント ★クリスマス★ [湘南] ライトパワー: ものづくり教室HABATAKI	19
[湘南] C.A.P.: 東海大学クリスマスU-Night!						
20 [湘南] C.A.P.: クリスマスU-night! ★エコキャンドルを作ろう!★	21	22 [湘南] MAP: X'mas Concert 2010	23	24	25	26 [清水] 三保: キッズランド
[湘南] C.A.P.: 東海大学クリスマスU-Night!						
27	28	29	30	31		
[湘南] キャラバン: ecocon2010						
[阿蘇] 阿蘇援農: 冬季援農活動実施						

1月						
月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8 [湘南] スポ社: 第3回東海スポーツ教室DAY	9
10	11	12	13	14	15 [札幌] 福祉除雪: ヤングボランティアサミット	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29 [湘南] チャレンジセンター: 電気自動車・燃料電池車・ ソーラーカー製作講習会	30
31						

2月						
月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
[阿蘇] 阿蘇援農: 春季援農活動実施						
14	15	16 [湘南] MAP: オペラ「CAMELIA」 [湘南] キャラバン: 環境教室	17	18	19	20
[阿蘇] 阿蘇援農: 春季援農活動実施						
21 プロジェクト最終報告会	22	23	24	25	26	27
[湘南] キャラバン: 春期キャラバン						
28						

3月						
月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5 [湘南] キャラバン: かながわ3R祭 [湘南] スポ社: スポーツ特別教室	6
7	8	9	10	11	12 [熊本] ACOT: 自律型ロボットプログラミング講座	13
[湘南] TFC: 富士スピードウェイ走行会						
14	15	16	17	18 [湘南] C.A.P.: ThLive! Vol.13発行	19	20
[湘南] ライトパワー: サウジアラビア王国 アレクサンドリア大学等との学術交流						
21	22	23	24	25	26	27
[阿蘇] 阿蘇援農: 春の援農活動						
[湘南] ロケット: ロケットボーイ&ロケットガール打ち上げ支援						
28	29	30	31			
[阿蘇] 阿蘇援農: 春の援農活動						

- ライトパワー: ライトパワープロジェクト
- TFC: Tokai Formula Club
- ロケット: 東海大学学生ロケットプロジェクト
- C.A.P.: キャンパスストリートプロジェクト
- キャラバン: 環境キャラバン隊
- MAP: Music Art Project
- サイエンス: サイエンスコミュニケーター
- 病ボラ: 病院ボランティアプロジェクト
- スポ社: スポーツ社会貢献プロジェクト
- ACOT: 先端技術コミュニティ「ACOT」
- 三保: 三保活性化プロジェクト
- 阿蘇援農: 阿蘇援農プロジェクト
- 福祉除雪: 福祉除雪プロジェクト

湘南キャンパス…湘南 札幌キャンパス…札幌 旭川キャンパス…旭川 清水キャンパス…清水 沼津キャンパス…沼津 熊本キャンパス…熊本 阿蘇キャンパス…阿蘇